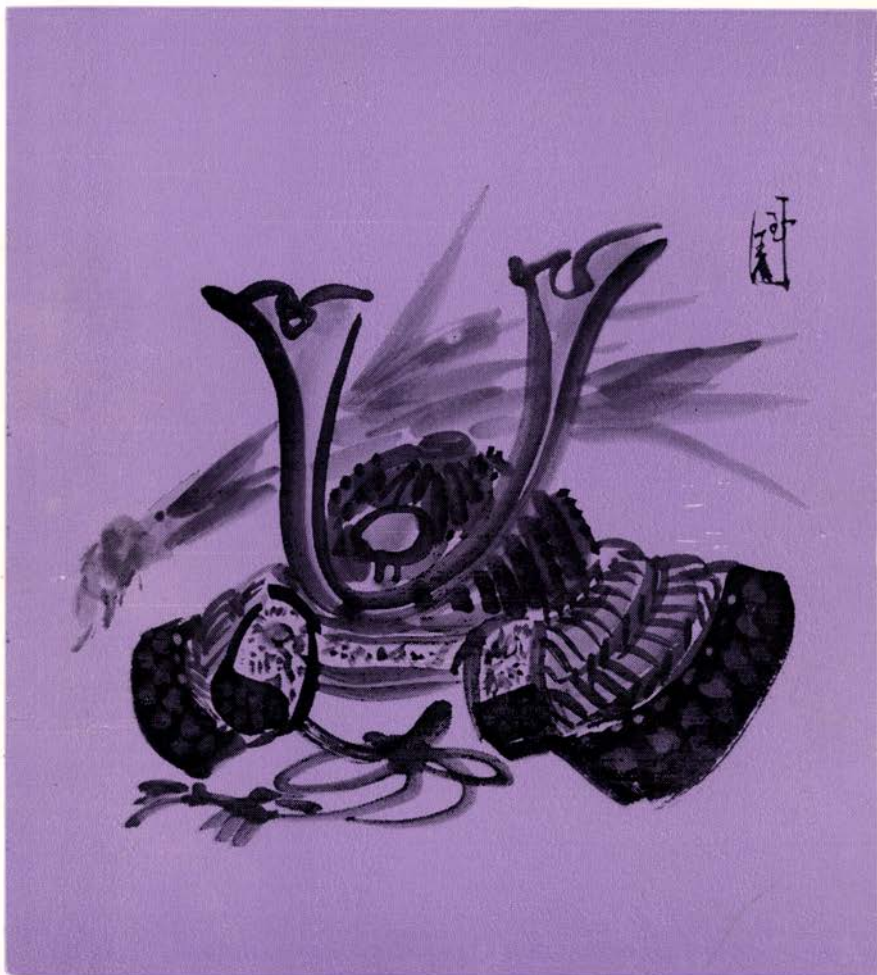


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十五年五月二十五日 印刷
昭和四十五年六月一日発行 (毎月一日発行)
(第五十七号)



No.57

六月号

黒潮躍る

紀州路へ



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに6号…(毎日)…12時51分発

急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発

＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

春雨の緑に染まず紅椿

むかい風傘の雫も春の雨

信心をひけらかしげに数珠を持ち

ビニールで土の体調狂わせる

紋太氏を悼む

人間を貫く八十年の娑婆

祈り

科学の力をもってすれば行くところ可ならざるはなしといった科学者の傲慢さに警告を発したのがアポロ13号事件だ。これは毎日新聞の座談会での一記者の発言であるが、人智への限界の反省を厳しく指摘した言葉である。折も折とて事故が発表される前日の読売に「人間は贅沢なもので月着陸も三度目になるとそれほど感激しなくなるばかりか理屈通りにいきすぎるとおもしろくないなどといかねない」とあった。妙に予言めいていたが結果は面白い等という程度ではない教訓とな

った。人智のどこかぬ大宇宙の絶対者を恐れる心と謙虚に拝む心を見失わぬ気構えが科学に徹する以前の問題として必要であると私は思う。帰還後初の記者会見で神の助けを考えたかとの質問にラベル氏は私は神に祈った、われわれと地上の人々の祈りに神がこたえてくれたのだと信じていると答えた。果して、この祈りは完璧までの科学を信じる技術の力と出発の瞬間にはどちらが先行していたらうか、そして神様はそんなに気のいいお人よしだろうか。



中島生々庵

川柳塔六月号

川柳塔六月号目次

祈り

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

川柳塔……(同人作品)

わかる句・わからぬ句

川傍柳初篇研究……(八十四)

前田喜代人・岡崎重義・清川端柳風・故高須亜三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

漢詩人と芭蕉(大陸巷談)

近作柳樽

秀句鑑賞(同人吟)
(近作柳樽)

九輪抄

人妻へ

座右の句
ふるくとも僕には仁義礼智信
私の句
戒名はなんとつくやらへソ曲がり

(路郎)

工藤甲吉

中島生々庵選……(1)

中島生々庵選……(4)

浜田久米雄……(2)

東野大八……(22)

北川春巢選……(30)

川村好郎……(24)

西尾葉……(25)

清水白柳選……(40)

高鷲亜純……(19)

わかる句

わからぬ句

浜田久米雄

われわれグループでの句会ではそんなことはほとんどないが、時たま大会に出席して見て感じることは選者が読み上げた句がピンと来ないのがふえて来たことである。みんなの眼が選者席に集中して固唾をのむ緊張さの中で読み上げられる句境はまた格別のものがあるけれどもなにを読んだのか作者はなにを訴えているのかさっぱりわからぬ句が披露されるのである。頭をかしげても目をくるくる回しても納得のゆかぬ句が抜けている。選者によつてはほとんどの句がそれでわけのわからぬままに一席の終りとなる。

柳誌は数冊しか読んでいない私ではあるが、その柳誌の中にも句会の披露といつしよで不可解な句を見受ける。これがこの頃一段とふえて来たようだ。よくわからぬけれどこんな句が革新川柳というのであろう。古川柳

川柳徳川記……(十五)……富士野鞍馬……(26)

橋本緑雨氏逝く……麻生葭乃……(44)

北川春果・清水白柳

近詠……諸家……(19)

嗚呼・紋太先生……橘高薫風……(39)

何を読んでいましたか……(同人特集)……野迷路・柳慶・美代・千翁・千梢・千代・瑞枝・克枝……(27)

初歩教室……本田恵二朗……(50)

岡山県下同人懇談会……浜田久米雄……(56)

大萬川柳「良心」……清水白柳選……(52)

柳界展望……(薫風)……(54)

本社五月句会……(庸佑)……(57)

各地柳壇……(文秋)……(60)

一路集「ウインク」……中村ゆきを選……(48)

「平」凡……岡村久志良選……(48)

編集後記……岩本雀踊子選……(49)

(一三夫)……(65)

座右の句

消える虹なれば 尊く美しく

(葭乃)

私の句

男みな阿呆に見えて売れ残り

山川阿茶

から発した現代の川柳には飽きたらぬとする革新派の面々が別の境地を見出したと言うがまっすぐな川柳の道を進んでいる柳人と別の方向の道を行っているとしか考えられない。大会へいっしょに出席した柳友の口からはあんな不可解な句を抜く選者にはむしろ入選しない方が気がさばさばする。わからぬ句は聞かぬ覚えぬとして膝を打って深い感嘆の溜息が出るような句だけ聞いておればよいというのである。

川柳とは世態人情の機微を看破し洞察するものであると教えられて来たしまたその方向に向かって歩んで来たのである。これら不可解な句はもち論作った人には充分にわかっているであろうが、聞く人読む人に解せぬから読む気も聞く気もなくなる。十七文字の中で上中下それぞれがとってつけた文句でつながりがないのであるから全体を二読しても三読しても要領を得ない。これはひとりよがりの句としか考えられない。われわれはひとりよがりの句は駄目だと教えられて来た。読む人十人のうち十人がわかれば申し分ないが、せめて五人以上の人にわかってもらえるような句を作ったり読んだりしたいものだ。



中島生々庵選

大阪市 正本水客

頭打ち打ち人生に無駄がない

他人ごとだから散る故にこそ美しい

氷の下に生きていた湖が顔を出す

丹前に金を持たない二三人

棟方志功木に噛みついて木を刻む

下関市 石川侃流洞

奥の手でどうにか勝って来た空虚

席蹴った後姿の肩が張り

姿見へ生きてく今日の嘘を塗る

合格へ学資の都合まだつかず

浪人へ風が冷たい新学期

大阪市 児島与呂志

オヤジさんと呼ばれうっかり返事をし

よく食べるなアと娘等に云えず

娘等気嫌よい日妻むくれとり

成るようになるさゴロゴロ娘等達者

米子市 八木千代

旅ふつかあまりに多きものを見し

遅い子を待つて夜なべの灯をさげる

母さんも見てとデートへ招かれる

子が継がぬ鍛大切に光らせる

迷い振り切つて心の積木つむ

岡山県 大森娛句楽

仙台の旅

網棚へ盆栽土産大き過ぎ

一望の仙台の街霞呑む

瑞巖寺の余徳のように霞伸び
大旗旗迎えるように島が散り
松島の望遠鏡で陽が沈み

京都市 都倉求芽

早春の陽へ勿体なくもアーケード
物わかりよすぎてすぐに妥協する
賽銭の小銭確認して家を出る
心配はいらんが三度目の葉替え
幼稚園テレビどおりのへらず口

諫早市 川岡靈眼子

友情に貧富の差はない手の温み
お代りが欲しい銚子の底をふり
ポン骨でよしガレージが映えて来る
手鏡に青空がある幸を見る
万博を吾がものとせず遠く居る

倉敷市 本田恵二朗

納める気あるから税務署でねばり
CMに釣られた旅の雨続き
緩急自在老妻にコッおぼえられ
少女趣味或る日の妻が若く見え
悪人になれず善人にもなれず

東大阪市 久米奈良子

出る幕でない女世帯主
捨てられし路傍の花よ慈雨に生き
多すぎた言葉へ自戒の夜を刻む
春雷におどろく母も病よし
背信へ炎の如き過去を積む

大阪市 本多柳志

突っぱねて戻った白い日記帳
出る杭になれと初心を教えられ
鳥居までさざえの焼ける香を歩き
奥能登の旅をさくらに追いつかれ

万博有感

パピリオン並べて政治調和せず

和歌山市 垂井葵水

電話ではお馴染ですが初対面
お喋りがすめば自分を知るだろう
養子ではないのに妻と母が組み
ホステスのマッチ話の間を持たす
胸襟をひらき足元すくわれる

高槻市 傍島静馬

妻の眼にうっかり母とも話されず
銀行は貸さず下請には泣かれ
少年工ものになったらよそへ行き

一粒のポーロへくねる象の鼻
モデル今日百万円ほど着せられる

今治市 越智一水

貧しさへ部屋のもようを変えてみる
輪ゴムしたままあわれなる妻寝入り

大和路にて

大和路を歩けば土が語りかけ

薬師寺にて

釈迦さまの足の裏までおがまされ

父の一回忌

父の墓洗えば洗うほどさみし

豊中市 戸田古方

締めてしもうてからこれは伴のネクタイや

晩霜予報桜よゆっくり咲き給え

ボールペンで描いても飛鳥の仏なる

大まかなプランは去年の時刻表

不労利得の誘惑にまた負けそうで

岡山県 浜田久米雄

妥協するところを年のせいにする

恐ろしさ女が髪をふり乱し

知りすぎていながら受ける二日酔

若返るくすり目につく年であり

また念を押す癖が出る酒の酔い

大阪市 金井文秋

妻の病氣回復期に入る

危機去って白髪を染める気もおこり

片意地なところも出て来て癒え近し

お見舞の借りを数えて癒えて来る

病床で咲いたさいたと聞くばかり

平凡程いいものはなし臥て思う

堺市 吉田圭井堂

敗戦の国かと思うこの生活

減反の徹した頃に来る不作

派手な人だったと踊る一周忌

落ついて聞けばつまりは無心なり

見納めと今年も花を追う齡い

出雲市 原独仙

杖ついてまで妾宅への情涸れず

わが道をゆく断絶の世が悲し

死してなお噂残したへソ曲り

赤銅の肌重労働に耐える艶

交配を蝶へ托して花開き

島根県 堀江正朗

妻の手にする散歩も春陽から

出勤の子へ秒読みの妻の朝

闇ひとえ引裂き見たし子らの顔
しあわせに馴れた愚痴だと羨まれ
最後の景脳裏へ焼印のごと

倉敷市 小幡里風

小さい嘘大きく心電図が乱れ
街角でつかまえられたアンケート
僕んちの太陽盗むビルが建ち
言い分が猫にもあつた頭付
一本の白髪見つけたコンパクト

大阪市 橘高薫風

噴水と相似の緑 柳なり
雪国の桜でありし桜漬け
邂逅 心臓赤い霧となる
別れてはまた揺れる振子か

万博ソ連館

チエホフの卵を生みそうな眼鏡

広島県 高橋鬼焼

散る事をもう考えて咲きはこり
恋かしら爪のよれが気にかかり
小廻りのきく自転車にたよりきり
背のびする土筆を踏んで松葉杖

小松市 馬場魚山

すぐ消える宿命と知る春の雪
居座った春の寒波へキャベツの値
値にふれて春はまだまだ主婦の籠
記念品段階つけた寄付の額

倉敷市 水粉千翁

湖透けるころの乱れ沈めつつ
聞いてくれ叱っても呉れ里の母
ねらっていたとも云うチャンスなどは無い
空財布せめてふところ手に握り

青森市 工藤甲吉

経験があつて左遷を慰める
金なんてそんなものサと長者の死
いつからか土を忘れた足の裏
話し合ううちに亭主はもうイビキ

八尾市 高杉鬼遊

歩行者へ美事な泥を跳ね返えし
春闘がどうあろうとも金が崎
ぶらんこの人生やがて天へ蹴る
仏石が花のいのちを肩に浴び

大阪市 大坂形水

掉させばとどく佐渡とは唄のこと
帰途コース東京廻りとゴルフ組

人命の補償にワクができてゐる
地下街も流行らぬ店と流行る店

大阪市 山川阿茶

モンブランで書いてる健保阿呆らしく

思いきや赤軍の徒が詩を吟じ

絵どころがあつてモデルが口を出し

ファイナレは静かな静かな鐘一つ

門真市 福島鉄児

遺産どころか借金だけ残し

相続税金策つかぬまま迫り

吹き溜りこんなところで見るとおしめ

扇ひろ子

マスコミを騒せましたレスビアン

竹原市 森井菁居

糞虫も孤独自力でぶらさがり

価値感と別にボウブラ生きている

苔でさえ愚痴はもらさず起きあがり

浮雲に詩あり好きな人と居る

鳥取県 谷 無閑

税務署にもう用のない裏住い

メモ帳の符号は一人だけのもの

愛情と恋とは別です悪しからず

更年期週刊誌からメモをとり

常夏になれて北風寒い朝

三男の死(三句)

あきらめよ妻をさとして蔭で泣き

クリスマスお棺へ添えて星条旗

屠蘇くめど無常の香り春の風

守口市 羽原静歩

万博によせて(二句)

春愁のポーズを消してモノレール

人類の進歩と調和へ物価高

型破り明治の羽織出して来る

投書欄日本の傷を掘りかえし

八尾市 香川酔々

凡人として恙なく棺に入り

日銭読む通天閣のネオンの灯

二日酔素破抜かれた綴方

上役が肴のうちは酔うて居ず

大阪市 室谷鉄舟

遅かった春へ冬眠腹が減り

落書に感心してる新駅舎

一日の世界旅行で疲れきり

ハワイ 上田紅溪

国産は一番いいんだ妻をほめ

笠岡市 木山要次

血圧も親の名残りの片身分け

癒ゆるには惜しい心の奥の傷

額の字の読めない俤に待たされる

善悪を知ってて悪が止められず

芦屋市 丸川初甫

停年のあいさつ廻りへ桜咲く

最高の出足賽銭箱の音

高びしゃに出たがやっぱり妻に負け

訪問はベルより先に犬が吠え

倉敷市 野田素身郎

妻子には想像できぬ媚で生き

所長室主が変れば絵も変り

感謝状の手前今更投げ出せず

内緒話がすこし聞こえて落ち着かず

倉敷市 藤井春日

若い気であるのに交差点手をとられ

格式を云うて院居士金で買ひ

幸か不幸か土地の切り売りする生活

折角の晩酌女房家計のことにふれ

倉吉市 奥谷弘朗

鉢巻が囲む当局小さく成り

俺でなきゃ出来ぬ仕事を持つ自信

窮屈に思いながらも夫婦です

困ったら来いと言ったに困り出し

大阪市 酒田清子

入院(二句)

消燈後テレビこっそり見るスリル

マスコミに子ものり親ものせられて

本棚を背のインタビューえらく見え

少年のたまげた大志笑うまい

笠岡市 木山遠二

二級酒へ熨斗をつけるとみすばらし

日曜日散ってしもうた下で飲み

一本で五六人酔い長閑なり

うっかりと生きて来たのに気づく古稀

広島県 岩谷二三枝

人生暮色すりきれた絃掌に残る

耐えてゆく重さに狎れた仮面です

女ひとりワイングラスの愚痴に酔う

四捨五入きりすての桁にいる私

竹原市 山内静水

妻五十あっちこちに灸をすえ

エスカレーター二三歩あるいて気を静め
うまくゆけばの話たのしけれ
有言実行覚悟は出来てる風当り

大阪府 中川 滋 雀

雄図もう妻子の枷に消えかかり
春雨へ濡れてゆくには連れがなし

伯母死去（二句）

ほっとして天寿讃える通夜に居る
葬式でも無けりや会えない久しぶり

美禰市 安平次 弘道

マジヤンに誘い性格打診する
田植唄古米減ろうと減るまいと
誘致した手前公害がまんする

実よりも名を取る役所見栄があり

京都府 大鶴 喜由

お目あての人は来まさずぶっちゃぶら
花とボンボリ飲まずに酔うた腕を組み
社交ミニもマキシも詠える

声は男 姿は女春寒し

大阪府 木村 水洞

事故おきるまでは対策はつとかれ
仲のよい夫婦へ長屋物足らず

万国博進歩と調和の外でデモ
国力の相違を見せるパビリオン
万博へ音信不通が頼って来

熊本県 有働 芳仙

髯剃らぬ方がイカすとおだてられ
肩書がイミテーションとは思わせず
ラブレター郵便番号忘れない
風を切るタイトは恋をまだ知らず

高槻市 福田 丁路

自衛隊或る日頼みの綱となり
気が向けば大慈大悲の観世音
職業となれば道化も楽でなし
忠魂碑見向きもせずに通り抜け

大阪府 天正 千梢

恥のかたまりの金で酔いつぶれ
人間に成りたい心が読書させ
饒舌に気づき貫禄とりもどし
ピンボケのような暮らして半世紀

堺市 高橋 千万子

就職をたのめば嫁に行きなはれ
五等とは待った時間がおしまれる
万博の公害を見る台所

チューリップ私と乾杯してほしい

大阪市 神谷凡九郎

何とかなる浮世が人を悪うさす
生きてゐる悲哀一番可愛い自分
まな板の上へ自分をのせて見る
酒も笑つて明日のための酒の弁

姫路市 隠岐不酔

栄転を名刺に肩書つけて刷り
俺にだって覚えがあるぞカンニング
呼ぶ人があるなら呼べと医者慈悲
司会者が粗酒粗肴とあてこすり

笠岡市 松本忠三

信号は青でもびくびくして渡り
末席を汚しよく飲みよく歌い
風呂敷を持ってますよと土産物
万全を尽すと医師の言つたまま

奈良市 宮口笛生

日本のひずみに古米古古米
沈丁花香う旧家の壁が落ち
月給日だ印鑑の掃除する
日曜の顔を鏡に写す昼

下関市 国弘半休門

百聞の上で万博見に行く気

先生に馴染ない子の母を連れ

ポイントで揺れて通勤眼をさます

苦節十年靴のチャックすり切れる

神戸市 仲どんたく

マージャンがゴルフに代つただけのこと

赤軍派のように二次会へ連れて行き

濡れて行くほどの雨なり三分咲き

M氏ハネムーン

新妻を耶子の木蔭でミニで撮り

姫路市 村上春巳

チエックする赤エンピツに蹴落され

損得を口にする程貯めていず

御役所も事故には慣れた見舞金

釈迦三尊飛鳥を語るお口元

伊丹市 小川静観堂

友人〇〇女子大教授に転ず

春や春すみれタンポポ交るむ鳥

お代官でも貧乏だったお祖父さま

好きな人を夢にのせ老らくまたたのし

わが庭の朽木の梅も雨の春

大阪市 川口弘生

誕生日くじも一枚買ってみる
誕生日にやっぱり降った雨男
雨男を秘めて旅行に参加する
貧乏の徳孝行な子に育ち

愛媛県 村上旭童

暴落の時はだまっていた野菜
百姓に今度は何をつくらせる
子を叱る程の親かときかれそう
花の下女の方が酔うている

竹原市 小島蘭幸

振り向いてまた歩くよりほかになし
最後までボーカーフェース崩さない
春のころの視線定まらず
淋しさが顔に出ているのに笑う

堺市 新谷笑痴

大根の値段へ総理かしこまり
顔色を読む児になって陰が出来
優勝旗二本が欲しいよい試合
出稼の父があわてた子の背丈け

倉敷市 小野克枝

忙がしい暮しへ智慧の輪が解けず
石橋を叩く男に借りが出来

寄りそうてすべて納得したい妻
思慕を封じた空白の日々重く

富田林市 岩田美代

金に飽かし優雅に病んでいるベッド
刺す事も忘れて蜂の花に酔い
八卦よう当てたなと思う三りんぼう
茶柱の立った期待も裏切られ

岡山市 光好陽子

嫁入りを忘れてしもたか三十二
スーパの合戦広告ならべて見
借金があっても豚のように肥え
肩書きがこうまで八方美人にし

出雲市 野村岬月

笑顔とは別です最底の生活です
本当の顔へだまって酌いで呉れ
サクラさくらまた一年が過ぎてい
にっと笑えば太陽のあたたかく

松江市 中川晃男

峠から振り切る故郷の苦い過去
見送ったついでに月がほめられる
交番も大あくびして春うらら
少年の夢へメダカは掬われる

兵庫県 河原みのる

ペンペン草精一杯の春歌う
錯覚と後家になるまで気が附かず

岡山県 直原七面山

さすが税吏ニコリと痛いところをつき
黒棒がまだまだ天寿やなかったよ

郵便局だけが国旗出す田舎町

肩の手ヘイエスと答えているうなじ

岡山県 田村藤波

与える幸はキリストのもの
画布にチラチラ散りゆく枯葉
音痴も歌って宴佳境

花咲き花散り亡妻の三年忌

奈良県 石倉旅風

犬も猫も元禄景気酔うて春

古稀に吹く奈良の春風寒からず

売られゆく仔牛と知らず跳ねまわり

欠伸かくす大きな口に掌が小さい

出雲市 王紫

春風にようやく旨し奈良の水
陽が頼り方向音痴奈良に住み

長幼の序列を泳ぐ鯉にみる

くり返す真理は常に少数派

不器用な手に生涯を支えられ

痛恨事母の涙が届かない

松江市 吉岡通児

仏が淋しがるからも一つ泊らされ

笠岡市 出原真奇

ある時は凄味を効かすのも政治

聞きあきた自慢話が古典めき

はち切れる若さがマナーから脱れ

ゴルフしに来た訳でなしわらび狩り

大阪市 西森花村

使われる気になり機械おとなしく

同居していながら断絶親子仲
農多忙横着病の俺は釣り
信心に凝ってて毎度医者通い

岡山県 池田古心

藤井寺市 西 いわを

騙される性で親友多くもち

人生の裏を見透す不倖せ

行詰り元来た道へ引返し

大阪市 宮尾 あいき

雨嬉し帰り仕度の娘を止める

富士五湖巡り

寝不足の眼を驚かす朝の富士

五湖巡りバスへ富士山ついて来る

岡山県 横山 一声

やせる思いですと女よく太り

春の道一人ぼっちとは淋し

この家も共働きか戸が締り

桜井市 岩本 雀踊子

葉桜へ仁王もつかれた鼻の穴

夢を大切にして女 年をとり

六十をかみしめて見るお茶の味

大阪市 福井 野迷路

いたわり合う新語老婆だけが知る

生活の知恵の一つにうそがある

たまさかの休みにパジャマ着る男

松原市 谷垣 史好

髭剃ってもらう無抵抗の快感

割烹着男寄せつけない白さ
妖精がいそう小さな花の店

松江市 柳 楽鶴丸

天の岩戸のように居留守鍵を掛け

伝統と自信でつくる玉鋼

指切りの子指と子指に血がかよい

島根県 小 砂白汀

蜜蜂の蜜にまみれて死ぬさだめ

ふりむけばわが足跡の蛇行線

空を切るひとりよがりの投げキッス

大阪市 今 西章雅

雑用が彼岸の墓参おこたらせ

漫才にも笑わぬ夫の顔みつめ

趣味のない妻の老後を考える

愛媛県 渡 辺 曉 童

晴耕雨読と職業らんには書けず

自動車の数で気をのむ選挙戦

上品な箸に妥協をしないすし

下関市 桜川 不 水

せめてもの抵抗か蚯蚓の放射能

傷つけた蛙へ鍬の手が止まり

老妻も二ついただく桃の酒

平田市 久家代仕男

やけ糞のように耕耘機の響き

シャボテンの刺にも光る春が来た
留置場の高窓を打つ柳の芽

大阪市 有信新之助

ことなくすり服んだかいなと大掃除
ぜいたくな大あくびして昼に起き
呼出しの電話を覚えておくおんな

鳥取県 清水一保

初つばめ我が家へ舞込む佳い日和
小さくとも宇宙へ残さん足の跡

よど号乗取り事件

飛行機の危機にも遠く畑を打つ

大阪市 河井庸佑

ライバルとなる親友も合格し

花嫁と並んだ親友別の顔

新鮮なさかなを食べただけの旅

富田林市 浅川八郎

特急で荷物のように運ばれる

お互いに時をかせいで埒あかず

双方に言い分があり赤い旗

岡山県 出原敬一

コップ酒いりこ二匹を上手に食い
肚にあるほうが愚妻をやたらほめ

子らの愛病母へ悲しい嘘を言う

久留米市 永松道雄

おせっかいなお隣様が入りびたり

流れゆく世はさまざまの筑後川

花びらを浴びて嬉しい花見酒

竹原市 時広一路

もうこれで三日乾かぬ傘が連れ

騙されてやる気楽しく見る演技

あした逢う別れのようにさようなら

鳥取県 森田布堂

立ち読みの弱味にノート買って出る

日の丸の風呂敷が出た大掃除

愛称で呼んで弔辞が泣きじゃくり

岡山市 川端柳子

満開へ殊更らしい春の風

河岸変えて雑魚が悟った住み心地

軒先を燕にかして運を待つ

大阪市 西川誓二

落書の相合傘を地で二人

飲む酒に心の憂さを見透かされ

姪の結婚式に臨み

両親も苦勞忘れて晴れの顔

米子市 林瑞枝

負けぬ氣を寢言に見せて子の昼寢

別れなさいと云うた易者をふとつまみ

入試終え子は茶柱の湯氣を吹き

和歌山市 増田次章

手不足というが税務署まめに来る

発車してしばし花束もてあます

清潔な下着を誇り生きており

小松市 四方天弘実

巫女さんも綿菓子欲しい春祭り

ゼット音いやな話を消して行き

神経の太さたまたま図に当り

東大阪市 竹中綾女

延長戦野球嫌いもつり込まれ

鯉幟り子よりも親がはしやいでる

川柳の続けられそな職に決め

高槻市 山田季賛

嬉しさは結局妻にだけ話

傷口を見せて話をはずませる

人の辞表まで書くはめに会い

大阪市 本庄金三

工場の昼森閑と操短す

過疎地帯から万国博へバスが着き

鳥みんなねぐらへ帰り山の鐘

土砂採集蓄のままのねこやなぎ

飛鳥路にて

残雪を払うて二面石確かめる

お蠟燭ライターでつけて悪びれず

鹿児島市 土岐トク子

来年を励まし母の目もうるむ

出稼ぎへ打つ「フゴウカク」の頼信紙

一浪になり成長の自己批判

堺市 藤井一二三

大阪石油化学の火

くらし支える火が公害の名で燃える

桂離宮拝観

宮内庁の節で桂の庭を聞き

女のファイトまざまざと見る特価市

奈良県 西辻竹青

皇太子殿下御夫妻室生寺へ御迎えして

妃殿下民の赤子をお抱きになり給い

妃殿下少しおやせになり給い

松江市 岡崎祥月

生活の齒車油の切れた音

妻と歩調合わせる趣味であってよし

松江市 小林孤呂二

奇麗いにするどころか埋立てる策
石のころろ冷たくせせらぎに逆う

米子市 石坂新雪

お味方を沢山置いて榮転し
香典もマジックつまらぬ顔で見る

加賀市 細呂木魯木

猛吹雪顔をゆがめず地藏尊

お祭りへ女の子がほしい妻のぐち

大阪市 福井多蘭子

病床で万博を見る世に生きて
春へかえる退院の足土を踏む

和歌山市 西尾公作

花束に恋の成就をまかしとき

艶のある電話美人と早合点

和歌山市 土谷城石

花束を抱かして惜む雛流し

低気圧新婚旅行も中止させ

東大阪市 竹中肖二

春四月僧が雪かく永平寺

日本のひずみここにもハイジャック

大阪市 島野大吉

小さく共祖父の祝うた鯉を立て

あねさんに冠れば婆にも出る色気

大阪市 宮地双楽
年甲斐もないと云われる舞扇
凡人の我に誇りが一ツあり

堺市 伏見茂美

明治生れ徒弟の礼をまだ続け

灰皿に恋の終りを残し行き

高槻市 若柳潮花

自選

まだ冬の色して庭の草眠る

花道は新ノ口村へつづく道

フレームで露の情けも知らず咲き

ヒヨコ売る籠へ彼岸の陽があたり

名古屋市 吉田水車

忘れると言うことあって救われる

よど号へ日本中がカラッポ

阿蘇山にて

ことあれば噴かん火口へ息をのむ

天草にて

排気ガスここ天草の山桜

島根県 藤井明朗

春らんまん朝の夢起こされる

おしゃべりが廻り廻って夫婦もめ

珍客を迎え送る（観桜川柳大会）

珍客を迎える桜晴れてくる

淋しさをかくす笑顔の別れする

八尾市 古川 鶴 声

花季節孫を見たさに出す便り

双児とは初耳だった人気歌手

淋しさは底う児のない夫婦

赴任して良かった山と海の街

大阪市 不二田一三夫

一本によられ二人は縄でいる

人間をみんな数字ではじき出し

寄席(二句)

林家トミさん逝く(昭和四五・四・二) 寄席ばやし、無形

文化財指定

故染丸の高座へ三味をさげて行き

松葉家奴師逝く(昭和四五・四・二五)

青柳のかげで釣りする人が消え

★

菊沢小松園

浮いている草とは知らず縋りつき

酔さめてからは無口なタイラント

ちりれんげ日本人のいい感度

心中するところまでコンピューター出さず

忍従の姿で抱持たされる

川村好郎

値切る方は妻にまかせて待つ財布

好きだから離れて見える席さがす

ぎりぎりのところではやける義理の愛

長期療養見舞う言葉もゆきづまり

ほんとうに高うなりましたナーと八百屋

西尾 葉

あてておみやすと女将あてさすことがすき

理解ある父 心にあたること許り

成人病センターまだ生きていた人にあい

なんや降っていたんかと春の雨

御神火や馬の背にある老夫婦

北川春巢

指の運動して来た煙草子に貰い

ふさふさ黒黒年令を訝られ

湯の旅を帰れば急にケチ臭し

化膿どめと酒で差引きゼロとなり

結婚満三十年(昭和四十五年四月)

過去は過去たらしめん 真珠婚

若本多久志

もう済むか済むか社長のメイ訓示

飲まされる方も打算のチョコを受け

人事移動クズばかりのやり場哉

冬越しのミニはいよいよたくましく

人命尊重今日もどこかでガスが洩れ

近 詠

須坂市 高峰 柳児

人生をとぼけ通したベレー帽
ボケの花満開残し転動し

名古屋市長谷川 鮮山

下請のもろさ手形でのしかかり

実印がもう物言わぬ落目知る

分譲地結局車も欲しい距離

倦怠期しおれたままである花瓶

大洲市 米沢 曉明

値上げ反対賃金上げる手が揃い
岐阜市 市川 鱈

歩みよることも忘れたむつまじさ

仲人の一人よがりがおかしくて

借り着とは見えず仲人胸を張り

東京にいるただそれだけの親の見栄

今治市長野 文庫

今治市 月原 宵明

「戦友」が涙ぐませる生き残り

日向ばこお迎えを待つ鬚小さし

妥結した労資へ桜散っていた

続けねば駄目と葉草予防線
地鎮祭銀行さんにも来てもらい

ここで事故あったとおどす曲り角
社長訓軍人勸諭のやき直し

紅一点はかに女がいらないから

人 妻 を

高 鷺 亜 鈍

人妻をかくしサービス過剰酔うた末
失明の男を抱え夜の稼業

ホステスの事故休業証明泣き寝入り

三味線がもてなくなつた後遺症

最愛の妻よと抱いてはばかりず

血だらけの意識不明を抱きあげる

いのちはとりとめなければ骨はぐちゃぐちゃ

愛情へ血だらけになり詫びる

他愛なく痛い痛い泣く悪女

雑草のごとくまびかかれても二人
悲しいことも嬉しいことも只二人
骨接へ通う女に盲父いて
老母の死わかつてるのに女泣き
老醜を棺に納めてホツとする
一升の神酒もぐびりぐびり二日でしまい
両腕もたれて杖宙ぶらり
鳥でさえ鳥の足跡樹にのこす

川傍柳 初篇研究

(八十四)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

622 べら坊な紅葉利根な川向ふ

梅斧

清||紅葉狩といえは吉原行きだった当時の句。

丸||同。

高須||「利根」はリコンと読む。利根川の向うの紅葉見物とはべらぼうなはなしだ。

という句だが、「霞ヶ浦へ落ちる利根川の本流から、閑宿にて別れて江戸湾に注ぐ流れもやはり利根川で、今はこれを古利根川

といい、その次に分派した江戸川があるが、いづれも利根川の水だから、真間の紅葉を利根にきかせて利根(リコン)といっ

た趣向で、実際正燈寺から吉原へこける遊蕩児に評させたら紅葉見物は大べらぼうに見えるであらうとは飯島花月翁の説だが、

この句利根をリコンとよませるところ、当時そういう銜学風の好みが行ったのであ

ろう。

清||紅葉狩といえは吉原行きだった当時の句。

岡田||利根をリコンというのは、当時では普通の用語。真間は千葉縣市川市、相当の道程だから、よほど根気がないと行けない。そのリコンというコトバで、利根川

(真間は利根川の岸にある)を暗示した句

623 泣たハよその子だのふと嫁だまし

一 甫

高須 ヒマな嫁さんが借り子をして、遊ばせているうちに、その子が泣きだした。嫁

さんは困って「泣いているのはよその子だね」とあやしている情景だが

うめんめえ上げようと嫁は借りて来る

借りて来ててうち／＼を嫁指南 一五・2

借りた子に乳をさがされてちぢむなり 一五・5

借りた子を刀んだ顔にして返し 一二・8

借りた子に嫁はおいろをつけてやり 一六・20

八木摩天郎著 古川柳に詠まれた堺の人々 送料共 七五円

借りた子に嫁美しい顔くづし 一八・19

など類句は沢山ある。 前田||賛。借り子でなくてもよい。 岡崎||賛。嫁さんがあやしているのは間違いないが、子供が泣いたのは、つい先ほど(過去)のことで、こういうあやし言葉は

現代でもよく聞かれるところ。

藤井〓岡崎説に賛。泣きやんだ子に「今泣いたのはよその泣きむし子だね、坊は強いから泣くもんか」とおだててほめている風景は今でもよく見られる。

川端〓礎稿に賛。「泣いたでしよう」という母親に「泣いたのはよその子だね」と借りた子に答えている情景だろう。

丸〓岡崎説賛。嫁とあるからやはり借りた子と見たい。

岡田〓古川柳では、姑に対する嫁のほかはほとんど新婚一年以内ぐらいの若い嫁を指して「嫁」と云っている。子供が出来るとかカミさんになり、次第にお内儀と交するその意味でこの句も嫁とあるのだからこの子供も、よその子と限定せねばならぬ。

621 鐘とぎの娘だと嵯峨でそり

魚 弓

高須〓嵯峨は祇王・祇女がイントンした地名。「鏡とぎの娘」とそしられたのは加賀出身の仏御前。共に平清盛にチヨウアイされた白拍子だが、仏が来て祇王・祇女はその地位をうばわれた。それで加賀出身の仏御前を、加賀だから親は鏡とぎだろう、とそしたのであろう。

長範を仏御前は見たという

一五・四

同じ加賀の人物だからだが、それをもっと悪くとして

熊坂がたねであらうと嵯峨でいい 宮二七
という句もある。

清〓賛。後にこの仏も念仏往生の心を起こして嵯峨を訪ずれ、祇王・祇女達と共に静かに余生を送ることになる。

姦しいのが引きこもる嵯峨の奥 宝十義2
女三人よればかましい。

丸〓賛。「鏡とぎの娘」とは、やる方なきフンマンを吐露して遺憾ない。

岡田〓賛。

625 衣類の入レものハ女郎持ている

眠 狐

高須〓吉原の女郎は自分の部屋（本部屋という）を持っていて、その部屋には一通りの道具が揃っていたから、もちろん衣類を入れるタンスだってあった。あけてみれば中にはたいしたものが入ってなくても、とにかくタンスはある、という句である。

傾城のタンスなんぞか有りはあり一八・35

傾城のタンスは本の犬おとし 七・41

明き店と書いてはりたいタンスなり

拾七・18

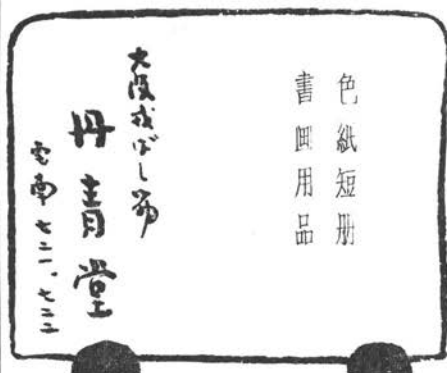
衣桁には一ぱいタンス何もなし 二〇・17

など類句がある。

清〓外見は派手なようでも内は火の車。主題日は、これをユーモラスに詠んでいるが遊女の悲劇の一面をついている。浅黄裏が遊女のタンスをひき出して、何も入っていないとあざ笑う文章を読んだ記憶があるのだが、今それをさがし出せない。

丸〓賛。部屋持ち女郎のタンス。

岡田〓同。一種のアクセサリーとしてタンスを置いてある。中をあけると、副食物や煙草が入っていたり、下駄まで入れてあったらしい。



漢詩人と芭蕉

東野 大八

桑原武夫は、「三国志演義」を十一回も読んだそうである。そして、蜀の成都を訪れ、孔明の墓まで詣でたというのだから念が入っている。私もこの話をきく以前に、三国志は何度もくり返して読んでいたので、これに関する限り、桑原先生に親近感を抱いている。

ところで、その三国志だが、私の場合は杜甫が、この本へのガイドの役を果たしてくれた形である。杜甫といえは、川柳人の私は、杜甫から芭蕉にパイプが通じ、やがてそれが「武玉川」の紀逸におよび、「柳樽」にパトインタッチされていったことを思う。芭蕉俳諧は漢詩が源流である。

「俳諧武玉川序」（初篇）に

貞徳老後の門人北村拾穂軒季吟、その門芭蕉翁桃青、初めて貫之躬恆の本情をさとし、李伯杜子美が骨髓を得られてより、此道の正風に眼を開て、中興の開祖となり、正風の翁と世挙て称し侍る—

—詩は漢より唐に至って三たび変じ、和歌また万葉の姿、古今に異也

とあり、俳諧軟化の過程を浮彫りにしている。紀逸の武玉川は、漢文による序文も数回あり、彼自らも四時庵（淵明由緒）と号すのもすべて漢詩に由来してのことである。芭蕉紀逸の漢詩への造詣が、後世の柳俳のハイウェイに通じたのである。俳諧の母胎とみられる談林俳諧は、田代松意、西山宗因などが呼称したことが、談林なる語源は僧侶の学問所の四書五經のグループによる檀林から出た。経書に明るい松意はこれを談林と洒落れた。江戸のこの談林に招かれた宗因を加えた興行が「談林十百韻」だがこの新風俳諧の呼称は、漢文の韻から名づけられたとみる。さて芭蕉だが、彼は作句とともに「野ざらし紀行」「葭の小文」「嵯峨日記」など、幾つかのルポやエッセイを遺しているが、これらの筆致には、李白、杜甫、淵明が酒精となり、西行を水分に、見事なハイボールを作りあげている。とくに「勾佳庵の記」は、杜甫の「岳陽樓に登る」などが露呈し、彼は漢詩に首まで浸りぬいたこのころのさまが読みとれる。

春望 杜甫
国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花に涙をそそぎ
別れを恨んでは 鳥にも心を憫かす
烽火三月に連らなり
家書 万金にあたる
白頭搔けば更に短かく
すべてしんにたえざらんと欲す

芭蕉は奥州の旅で、藤原一門の盛衰を中尊寺に弔い、はしくも愛誦の、右に掲げた春望を想い起した。かくて

夏草や つわものどもが夢のあと
閑かさや 岩にしみ入る蟬の声
の句を詠じた。前者は、そのものずばりだが後者のセミは鳥の声から発想されている。この作句に見られるように、芭蕉は、杜甫の詩境をわが心なりに内面化し、その城趾のペーソスを人間奥底の魂の声として聴いたのであ

る。紀逸が「李伯杜子美の骨髓を得られ」と記した、その「骨髓」こそは、実にこれに指す。

亡くなられた後藤梅志さんに、私は昨年、中尊寺土産店で求めた「夏草や」の拓本を、逝去直前の句集発刊祝いの席上でプレゼントしたが、梅志さんは莞爾として受納して下さった。この人の風貌、人となりやその生涯へのハナムケには、この句が最もふさわしいと私には感じられたからである。

さて、芭蕉が三十代末から四十の声をきく天和年代には、漢語漢文調が濃厚である。

髭風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子ぞ
雪の朝 独り千鮭を嘯得たり
馬に寝て 残月遠し茶の煙

など、枚挙にイトマがない。

「中国語は孤立語であり、各語が独立している。漢詩における語や句の句切れは、日本的な和歌よりはるかに大きく強い。音構造も中国語本来の姿は別として、日本語に組み入れられた中国語は音節の数が少い。同じ音節数の語を比較してみれば、はるかに密度の高い表現になる。五七五の枠内で表現するとき漢語を多用すれば、必然的に複雑な内容をもつことになる。短詩型の場合、その構成は、屈折が生じ、断絶が生じる」(永田友市「愛知教育委員会」)

さきに掲げた三句は、その好例である。殊に「馬に寝て」の句は典型的なものである。

芭蕉自身、この句は杜牧の「早行詩」に拠ると述べているぐらいいだ。

この秋は何で年よる雲に鳥(元禄七年)

晩年の芭蕉の句だが、下五の「雲に鳥」は往時の表現としては驚異とされている。この詩表現の註訳はさまざま、ある人は「山家集」「玉葉集」ともいい、ある人はまた淵明か、蘇東坡ともいう。

芭蕉の桃青ごろのテキストは、杜子美集、白氏文集、それに西行の山家集と一般にいわれている。同時にこのころの彼は、老荘に心をよせ、仏頂和尚に参禅したりしている。老荘の実存造化主義に、西行のもつ無常自然主義が一つに合わさり、それに沙門の先哲の唱える遁世鎮魂の禅門諦訳が加味したわけである。こうなると、人間誰しも旅への逃避が救いと思われる。芭蕉はかくして、僧形にして僧にあらざる凡化の旅の細道へと出ることになる。

島崎藤村は「早春」で「浅間の麓」後書で、「鶏は鶏とし、並び食いの句は、李白の詩をさぐって得たもの。杜詩をさぐって「うぐいすや竹の子藪に老いを啼く」の句を得た昔の人が盗人なら、自分もまた盗人のそしりを免れない」と書いている。このことは、杜甫の「上牛頭寺」に芭蕉の句が拠る点を指してのことだが自ら「詩泥棒」とした藤村は「若果集」を李白の「鳥夜啼」からそっくり頂戴して作りあげている。藤村の「梅花集」に至っては、

杜甫の「兵馬行」「王華宮」「贈衛八处士」の三篇に劉廷之の「白頭吟」を加えてのゴツタ煮で、最後の一行は淵明の「婦去来辞」をフリカケにしたしろものである。藤村いわく「芭蕉は精神上の旅人でもあった。西行へも旅し、定家にも旅し、李白へも旅し、杜子美へも旅し、寒山へも旅した」(春を待ちつつ)

「私はまた、芭蕉が好きだというだけのことには満足しないで、芭蕉の求めたものを求めようと志していた」(飯倉だより)

藤村は少年期から芭蕉に傾倒していた。そして、芭蕉の詩の足どりを彼は懸命に追従することにによって、新境地を見出そうとした。「雲白く遊子かなしむ」こそは、その蕉風傾倒への象徴であり、杜白の心への反照であるわけだ。

「模放は多きを憂いない。むしろその力の薄弱なるを恨みとする」(藤村文庫第七篇)

さすがの藤村も、こう言い切った芭蕉にサジを投げていた。芭蕉は、中国詩人の作品の骨髓をつかみとって、独自の蕉風俳諧を樹立し、古今独歩の偉大なる足跡を残した。藤村はこの蕉風に追ううとして、門口で敗れ去った。私は想う。藤村は藤村として、誰か漢詩の底から近代蕉風の骨髓を再開発する人は無しか、と。しかし、残念ながら今日の現代川柳の革新流は、漢詩どころか、漢語ばかりをチン列して、杜手の毛の一本すら引き抜くをあたわずである、ああ、やるんぬるカナ。

(漢語の功德は本文永田友市氏で参照のこと)

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

盛りのうちに散る花になりたくて

正本水客

惜しまれて惜しまれて他界する人、世間に忘れられ寂しく逝く人、不自然な死以外は人間の自由にならない命である。死ぬ時期がその人の一生を物語る気もする。さぞかし花も同じ心であろう。

寝つかれぬ夜はそこらが痒うなり

傍島静馬

難かしい文字を並べた句よりもこんな軽い見失われ易いところに川柳が転がっていることに魅かれる。心配に悩み眠れぬ夜よりもそこらが痒くなる方が倅せか。

蛇口しめるようには病氣止められず

金井文秋

入院中の奥さんを看護される作者の切々たる心情がよく出ている。作る句よりもにじみ出る実感の句に思わず繰返し味読したくなる蛇口しめるという批喩もそこから出た適切な上五であろう。

安全を信じて夜汽車みんな寝る

石川侃流洞

いつも中腰でビクビクしている人がもったらしい世相であるが、生きていく価値がない。信あってこそわれわれの人生があり、生活の建設がある。大きい力にまかせてこそ今日の一步がある。ユーモアの中に信の世界を教えている。

ふり向いてみても足音だけの僕

中川滋雀

誰もがこんな気持がするが、その足音は消えない。先祖の足音を聴いて歩んでいる如く子も孫も僕の足音を聴くであろう。足音だけでもよい確かな正しい足音を立てよう。

日めくりの早さを倅せとも思い

森井菁居

倅せとも思う心の展開が大切であろう。不倅せをさがせばキリがない。感謝をさがせば

ご投句にはぜひ、

川柳塔柳箋

一冊六五円・送料三五円

いくらでもある。喜びを発見してゆくのが生き甲斐というか。そんなことをこの句が示している。

身の非力言わず家相がどうのこの

吉田圭井堂

順境の時には家相がよいので、名前が良いのでは言わない。厄年と思えば怪我しても厄年だからとこじつける。人間の卑きようであり、責任回避である。

電柱の陰で喪章を借り受ける

松本忠三

思わず苦笑したくなる句である。苦笑する人は経験がある。ついでに寄ったのか、何々会代表になったためか、敬慕もなければ涙もない。電柱の陰はおもしろい。

(次号は若本多志氏担当)

▼小松園氏のかわりに三氏交替制になります

近作柳樽

秀句鑑賞

— 前月号から —

西尾 栞

引越してくれば隣りの犬が吠え

武内 雅堂

犬に吠えられる程、いやなものはない。然るに隣りに引越して来た主人と知らずして、吠える犬も哀れなれば、吠えられる方も哀れ、然しこの句より、おまえも今に牛蒡のような尾をふつてくるわいという吠えられながらも、隣りの犬に親しみが見える。

又もとの孤独に戻るテレビ切る

渡辺 南奉

独り居の所在なきに、テレビを見たが、そのテレビもまたつまらないもので、チャンネルを切れば、矢張り又もとの孤独にかえったという、単に作った句でない実感句として則々と迫る佳句である。

わが里の一角ビルの角が出た

大峠 可動

角が出たは、面白い表現だ。

ブラトニッククラブで退屈して別れ

宮西 弥生

作者が女性だからこわいみたい。近頃のデートはこんなんか知ら。僕等の時は手もよう握らなかつた。

失意の日母の愛さえうとましく

嶋本 満子

失意の時こそ、肉親の愛、とりわけ母の愛の言葉こそ慰められるのに。これは失意でも失恋に違いない。どうのこうのと気遣うてくれることが却って、うとましく、いっそ、そっとほっといて欲しい、よく解る、解る。

捨てる芥まで女見栄をはり

河原林 比呂路

女心を言い得て妙。

ハッスルをしてみて年だなと思ひ

目賀 芳月

何をハッスルされたのか知らないが、実感だろう。同感同感。

七人目の敵は靴をぬいでから

岸本 豊平次

敷居をまたぐと、七人の敵ありという譬えは、内から外へまたぐ意だが、これはこれ外から内へまたいだ七人目の敵は言わずと知れた女房だ、靴をぬいでからは旨い、ワイシャツの口紅、香水の匂い、七人目の敵は鵜の目鷹の目というところ。

他に

就職をする娘桜と共に振り

文子

農を継ぐぐらいなことにある決意
不義理のあいさつ電話でする不義理

豊平次
タカ子

ころぶスキーへ生理日まで変えて行き
スミ子

打掛の重みに愛を実感す
真砂

市民税だけのお隣さん今日も内
言い分もあらうに妻が詫びてくれ
洋々

欲しいものばかり茶碗やのぞいても
芳子

女房にネジを巻かれて出て来たが
村調子

(次号は川村好郎氏担当)

川柳家必読の「笑いのテクニク」

秋田実主宰・不二田一三夫編集

二周年記念号「漫才」定価 百円
送料 六円

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二二八

川柳徳川記

(十五)

富士野鞍馬

家茂もち

十四代家茂は、紀州斉順の子で、幼名を慶福といい、安政五年（一八五八）十三才で將軍となり、文久元年（一八六一）十六才で、仁孝天皇の皇女和宮と結婚した。
井伊直弼を大老として難局にあたったが、直弼の死後は威令行なわれず、長州征伐に失敗して、慶応二年（一八六六）大阪城で、二十一才で死んだのである。

家定

十三代家定は家慶の子で、嘉永六年（一八五三）三十才で將軍となった。

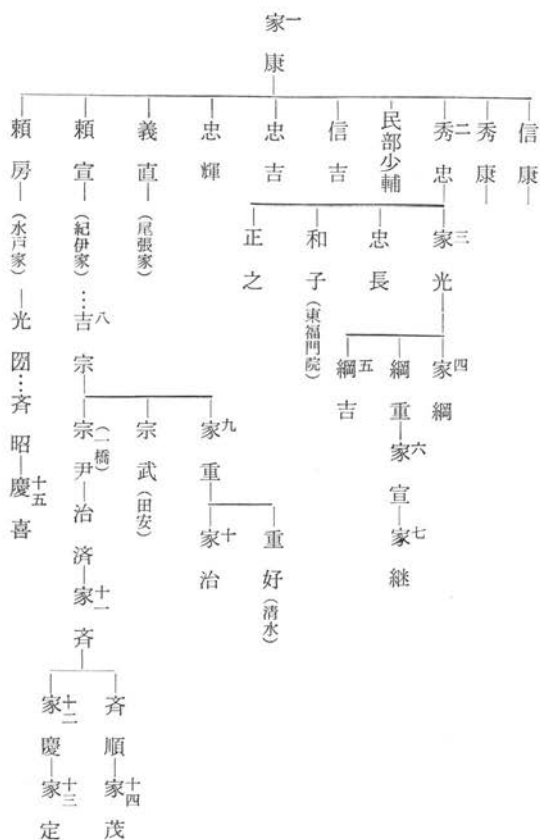
この年、アメリカのペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に来て通商を申入れた。それには幕府も国民も大騒ぎであった。

武具馬具屋アメリカさまとそつといひ
アメリカが来ても日本砲がない
騒がしてやつたとペルリ舌を出し
などの狂句や

太平の眠りをさます上喜撰（蒸汽船）
たった四杯で夜もねられず
という落首も詠まれている。

また安政元年（一八五四）にペリーは、七隻の軍艦を連れて再交渉にやって来た。そして安政三年にハリスを下田に駐在させたのである。

序幕はペリー大詰は原子彈（鞍馬）
家定は生来病弱で、内外問題紛糾の時に当



井伊直弼^{すけ}

井伊直弼は、彦根三十五万石の城主掃部頭であった。安政五年（一八五八）大老となり安政の大獄を起して、反対党を幽閉、殺戮した等の恨みにより、万延元年（一八六〇）桜田門外で、水戸藩士十七人に登城のところを殺された。その時四十六才であった。

万延をしのぶ雪のお堀端 （鞍馬）

慶喜^{よし}

十五代慶喜は、水戸斉昭（烈公）の子で、はじめ一橋家を嗣いだが、慶応二年（一八六六）三十才で徳川宗家を継ぎ將軍となった。幕府の内憂外患に直面し、遂に翌三年十二月大政を奉還した。その時慶喜は、江戸城を出て上野寛永寺に蟄居していたので、江戸趣味も葵の間から霜枯れる（久良俊）という川柳がある。ここにおいて、家康から十五代、二百六十五年の徳川幕府は幕を閉じたのである。建久



臍について

福井野迷路

昨日までは訳本のベストセラー「人間この未知なるもの」（著者カレル氏はロックフェラー医学研究所員、ノーベル賞獲得者）の続きを読んで居たが今日は大塚薬報がほり込まれた。この薬報を読んではとてころへ

このハガキが着いた日、あなたは
何を読んでいましたか？

そのご感想は？（編集部）

— 発表順不同 —

川柳塔編集部からハガキがほりこまれた。
「今何を読んできたかそしてご感想は」と来た。

昨日ならエーかっこ出来たのに何と云う皮肉ぞと思った。実は大塚薬報は日本中の医師薬剤師達に特別欄を設け、題して現代性風俗史と称し読者層を獲得しつつある。相憎く茲を真先きに読んではとてころであった。しかも今月の題目は性態まんだら（続）

三年（一一九二）源頼朝が、鎌倉に幕府を開いてから六百七十五年間の武家政治も、これで終局となった。

慶喜は、明治になって公爵を授けられ、大正二年（一九一三）七十七才でなくなった。

日本橋江戸のかたみを字に残し（当百）

東京日本橋の橋柱の文字は慶喜の筆であった右の糸図で見えるように七代までは秀忠系で八代からは吉宗系になっている。（おわり）次号から「川柳五十三次」が登場します。筆者が二十年の歳月をかけられた大作です。

で題目毎にへば川柳で綴られてあるのも面白い。お笑い草に、

両極はさて超ミニとパンタロン
待つて居たようにあつさり処女捨てて
マンションの壁に耳ある昼ざがり
モーターに息つくひまもない二人
ノーブラの愛撫互に興奮し
こんな型女体のアクロバット好き
○ グラビアの人氣女優とヘソルック。と云った工合、七十九才の老人にも結構面白い解説付きである。最後の臍について書いて見る。

西洋の美術品でおヘソの美しいのは何と云ってもビーナス像だ。浅いヘソ、曲ったヘソも醜いが出ベソは美観の命と云う。南雲博士はヘソの条件に(1)丸さ(2)大きさ(3)深

さ(4)上向き(5)正常位置、を挙げている。南雲式造胎術を完成した博士はセイ学入門と云う本を書いているセイは脐である。過去八年間に描出した出ベソの数はなんと四千個、いかに世の女性がヘソに悩んでるかわかるでしょう。

丸さはまん丸よりも少々タテ長がよい、日本人はどうも横長が多い、深さは美観に最も大切な条件で微妙なニュアンスを与える人さし指の先がスッポリ入り吸いつく感じのものがよい、上向きのおヘソは健康的でチャージング位置は正中線上ウエストラインから稍下がよい。

お脐の美それはセックスのためばかりでなく人間の運勢を左右する相な。女性よ、おヘソに関心を持ってよと云いたい。但し婆さんは別。

わい談も医者なればこそこもつとも

野迷路

「川柳塔」

弘津柳慶

四月三十日、午前十一時ハガキ受取りました。その前に、川柳塔を開いて、腹芸と初恋談義、ペンペン草を読み、一三夫さんの三がヅツコけてるなと苦笑しながら、「せんはい」誌に切り替えて。やる気を起す仕組は？に目を通し、目標による管理について、われわれのもっている、自己完成

への欲求、自己の評価を高めたいという欲求、創造的でありたいという欲求、などを充足させることが可能であるということ、これが生がいつつながる。とあり川柳道にもつながるとの感にひたっている。

「おそ松くん」

岩田美代

高三の息子が言いました。

何もエエカッコせずには正真に書いたらむづかしい事ありまへん。たしか面白い、面白くと言って僕のマンガ(おそ松君)と手塚治虫のSFマンガ三十億年の未来編(火の鳥)読んでましたね。大へん面白い。三十億年未来をマンガの中に見て弱く頭よけい変になったと思った通りの感想を書けば良いのです。」と、正にその通りです。

月末です嫌でも金銭出納帳にらまねばなりません。この感想はノーコメントにして頂きます。

「人間工学」

水粉千翁

題名は一見難かしいようであるが、進歩とか発展とか開発とかいう文明の前進と競争の中で「人間が置き去り」にされようとしているのである。その「人間性を取り戻

す」ための声である。世界の驚異としての日本産業の躍進の中から時々刻々と事件の数が折り重なっていることを現実に見せつけられている。

特に身近時刻をも予測出来ない交通地獄の様相は、結局人間自から創造した惨酷な武器をもって自からの命を断っているのである。それは文明から文明の終局を創る自殺行為である。それに自覚と反省を与えようとする要素に「人間工学」の解明がある。「人づくり」などという生やさしい言葉では救いようのないのが現実である。永遠の節理の中で地球を支配するのが人間であるとの観点から、人間らしき人間の創る機械であらねばならないのが「人間工学」であり、それが新しい文明を求める要素でもある。川柳はその人間造りを分担する陶冶の詩であることを付け加えておく。

「新唐詩選」

天正千梢

条幅の稽古の時、其の詩を十分理解解出ているのと、いないのとで、筆の運び方も自ずと違ってくるので、新唐詩選を何回も読みなおし、杜甫や李白の詩人として政治への関心を持ちつつ、人間にむかつて誠実であり、偉大な情熱をかたむけつつ、鍛錬された言葉で、情熱のはばを持ち、線の太い其の詩は、政治、酒、女、山水、いず

れをうたつても、読む者を酔わしめる、玄宗皇帝と楊貴妃との恋物語の華やかな時代も、月へまで飛んで行ける科学の発達した只今でも、人々の生活には、喜びあり、悲しみあり、嫉妬あり財をなす者、なくす者あり、この地球のある限り、老の口からは「今の若い者はなつとらん」ともらし続けるのはなかるうか、これくらいなれば平和なのだが、ボタン二つで核戦争にもなりかねない、おそろしい世の中です。

積んどく型

八木千代

年令が、そういう時期なのか、毎日バタバタ家の内外を出たり入ったり、来客の多い家でもあり、貧乏性の私がちよつと坐れば、編み物したり、刺繡したりで、読書には遠く、どうか自信のあるのは、台所だけという暮しです、おハガキを頂いて困ってしまいました。気取つてこの機会に、なにか人聞きのいい書物を読んでみようかと思いましたが、それも間に合わず、帰省のたびに「いい本だから読むといよ」と置いて行く、息子の本さえもサツと眼を通して自分の時間が出来るようになったら、ゆっくり読み返したいと、たのしみにして居ります。

「亭主を長持

ちさせる法」

林 瑞枝

柳友の千代さんが或る日「今度生まれ替つても主人と結婚したいわ」とおっしゃつてたが、私だって、そうありたいと思つてはいるが、当の主人が、もう懲り懲りしていて結婚を承諾して呉れるかどうか。そんな事など考え、せめて今生なりとも長生きして貰いたくて、石垣純二作「亭主を長持ちさせる法」を読んだ。

子供は成人すれば都会へ就職し巣立つて行き核家族はやりの現状を見るにつけ、一層、亭主に長生きして貰いたい願いや切である。

今から二十年前、戦後の家も職も金もない、いけば未知数の一人の男性を夫と選び将来への夢と期待に胸ふくらませ乍ら今日まで、どうやら人並のものも揃い、ときには宴会などあつて午前様で御帰りと云うことはあつても黙つて家を空けたことはないと言ふ品行方正なる亭主、その亭主の車の音が玄関に聞えれば、好きな柳詒や小説をばたりと、閉じて家業にいそしむスリルも又、格別。

裸一貫で築いた夫婦の思い出の数々を眺めて感無量である。「亭主を長持ちさせる法」を読み、世の亭主族の意外ともいふ反

面もわかり奥様業の大切さを痛感したものである。

誰からも好かれ恋人まだ出来ず 瑞枝

「啄木詩集」

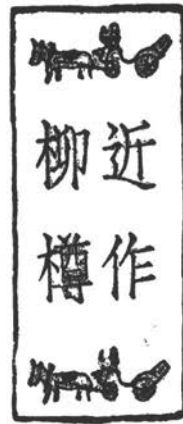
小野 克枝

今日もまた、この本を読んでいました。「啄木詩集」今は遠い過去となりましたが戦争一途に生きていた女学生頃から父の感化もありまして白萩、藤村、啄木等の詩を、好んで読みあさつていた私でした。今は色褪せて表紙も原形を無くしてしまつてこの小さな本。敗戦国の一員として祖国日本へ引掲げる為、顔に泥を塗り男同様の姿になつて三十八度線を突破したときも、リュックの底に秘めて啄木詩集だけを持ち帰りました。苦しいとき、嬉しいときは父が恋しいとき、川柳が作れないとき私はこの詩集の一句一句を味合ひながら読むことにしています。

五、七、五は大嫌いだと云つて短歌にのみ熱中していた頃があつたことを不思議な気持ちで思い起しております。

啄木曰く

「一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ、おれはその一秒がいたいだけ逃がしてやりたくない、おれはいのちを愛するから歌を作る」



北川春巢選

竹原市 三宅不朽

菜の花よ褪せた私をみつめさせ
妻がいる子がいる仮面しかとつけ
話そうよ叱って欲しいお父さん
ひとすじの涙悪女もただの女
人あたり酒乱の人だとは見えず

鳥取県 両川洋々

子の風邪を楯に二次会からは抜け
胃を半分取って二合の酒で酔い
趣味の会さえにも主流反主流
まだ何か塗る気鏡へ向き直り
三通話話して好きとまだ言えず

鳥取県 鈴木村諷子

萬歳の群集隻手を悲しませ
桃の花咲いて平和な郷に見せ
悔のない余生へ朝の足袋をはく

雷の父に涙の面もあり

大洲市 堀内眺風

決意した辞表抽斗だけが知り
案の定玄人着こなし言葉つき
裏口をたたけば表開けてくれ
愛情で育てた苗の裏切らず

岡山県 目賀芳月

甲子園金浦で納期またおくれ
別居用か県営住宅三百戸
作付をへらし増収の講義きく
桃色のうわさもつつんで春の風

和歌山県 ふきあげ虎城

本能と知性昼間は別に住む
二号邸にて横のものの縦にする
春は未だ来ずモニタージュ褪せている
メモ探す老眼鏡を置き忘れ

新居浜市 安藤桂仙

エプロンへ輪ゴムを溜めて妻達者
ロケットのように大根値がありが
酔う程に桜は目から遠ざかり
そろそろと持病呼びだす木芽あえ

大阪市 阪上十止庵

悪友と別れるまでの千鳥足

いてほしい娘に嫁けという世間休
人生を薄謝ですごく靴をはく
打明けぬ訳は万事にくだい父

今治市 真山国彦

年寄も子も居ず会場引き受ける
卒業式子に似ぬ親にお辞儀され
もう後は生まぬ心算か勤めに出
サウナ風呂出て肉料理食べて来る

下関市 志賀木石

素うどんの好きな社長の人間味
後半へ中華料理は満を持し
大都会墓石の如く並ぶビル

大阪市 黒田真砂

女の狭量愛の深さが計られず
ミニマキシ振り廻されて春や春

背のびしてつきあえば寄付頼まれる

竹原市 脇本政己

羅漢さんないてる方が僕ににる
愛だけで喰えるつもりでおりました
今宵ふとみだらな匂いがした水仙

大阪市 小出智子

生花展私の腕は棚にあげ
頬紅に世帯のやつれ隠されず
アイリスの色褪せたまま病みてあり

大阪市 河野君子

初運転父母出陣を送るごと
制服の新らで見直す娘の姿
砂利に似て動く歩道で行く無力

守口市 岸本豊平次

夕焼けに敗けるものかとネオンの灯
宮仕え盆栽に似て腰を曲げ
餌足りて善男善女に鳩は舞い

大阪市 小谷葉子

両掌に受ける寿がまぶしくて
誰が為の愛か見事な水中花
北風に両手を受けて女身なる

鳥取市 山形春海

さわがしいせり市女負けとらず

廻り道して弁解の時稼ぐ

幸福が一杯朝の化粧する

八代市 船 木 史 朗

言い勝ったあとで理性が目を覚まし

お悔やみの言葉を添えて請求書

旧姓を幸福そうに書き添える

西宮市 丸 山 孔 一

辞めますと即座に云える現代娘

応接セット片寄せて布団敷き

女房の愚痴もあきらめ気味になり

島取県 川 崎 秋 女

アリバイが有って男の太い眉

大衆につられて上げた手が重い

虹の橋女の嘘が美しい

島根県 大 峠 可 動

どなたかに僕の無職を捧げます

貧しさよさらば僕には明日がある

汗が目にしむ人生の大峠

島根県 錦 織 文 子

情報にただおろおろと子煩悩

負け嫌いな若さもあつたっけ

物価高小鳥も犬も猫も飼い

岡山県 武 元 柳 子

その中につむじ曲りの葱坊主

口惜しくて遮二無二庭に水を打つ

いろいろな疲れたまって春の風邪

島根県 堀 江 芳 子

恥ずかしさ去って転んだ痛みが出

デートにも似て銀婚の旅はよし

子に合やす苦労はジャズもシャンソンも

今治市 今 井 松 花

居合せた不運話のダシにされ

何度目のお湯か山の湯一人旅

元気でも寝込んで酒のせいにされ

今治市 大 本 バ ッ ト

叱る種次々作り子は達者

天災人災神のお叱りかと思ひ

パンのみに生きず浮気もしてみたし

今治市 伊 藤 一 郎

節くれた手で猪口を持つ披露宴

次の組廊下で待たせ披露宴

花嫁の近所廻りに鶏が逃げ

大阪市 山 良 圭

ロウソクに灯をともしごと恋めざめ
恋捨てて冬の貝殻抱いて去に

捨てての氣の恋を捨て場に困らされ

大阪市 西 本 保 夫

ボクの噂しそうな空氣の中に居る

子に託す夢も大きい平社員

大会社に居るばかりに平社員

島根県 梶 み どり

万博がゆさぶる物価天をつく

さりげない一言つきさす更年期

一人居のくらしに紅い花をいけ

広島県 南 条 露 声

親の氣も知らず騒がす日航機

汚職でもやれと女房に励まされ

ボタン付け頼んで恋の第一歩

松江市 津 川 紫 吻

因縁をいう別邸の石だたみ

見栄のない男やもめの台所

助手席へ試乗のお供サングラス

守口市 野 呂 杜 月

おふくろと呼ぶ頃からが手に負えず

婦人科の看護婦さんも産むらしい

何もかも金で片付く味氣な道弁 コ 下

大阪市 堀 口 欣 一

思い出は新聞ガミの大兜

町会の会計という名誉職

断絶のわが家例外とてはなし

尼崎市 中 谷 利 美

たしなめれば誰が産んだと反抗期

妻なればこそを一年病んで知る

お隣りが内政干渉して困り

大阪市 大 西 為 二

しあわせは肩たたき孫ひざの孫

お幸せになどと未練がたち切れず

近道を知ってて恋が知らさない

東大阪市 斎 藤 三 十 四

五十五才弱虫小虫愚痴の虫

機転利く嫁とは酒を出したこと

酒売るは媚も添えねばならぬもの

大阪市 木 村 洙 水

花便り静かに盲人聞き流し

古里へ錦飾らず五十年

大根の切売りはやる物価高

東大阪市 宮 西 弥 生

中年の恋表情なく迫る

働いている者同士で口達者

大阪市 江城 修史

待ち呆け心に余白まだ残し

寡婦として生きる耳に栓をして

七尾市 松高 秀峰

P T A ライバルがいて厚化粧

減反も決り万博バスに乗り

新潟県 高野 不二

万博のグラフ買うだけにも迷い

祝電ですませて酒は一人飲む

八尾市 高杉 千歩

母の歩に合わせて桜散る山路

四年ぶりの墓参

墓の背を濯ぎ清めて父を恋い

諫早市 原田 明春

偉そうに見える女もしまい風呂

金にふれけちんぽ話にいきづまり

島根県 中島 英子

嬉しさは万博へゆくほどに癒え

眼鏡かけかえて情報まちかまえ

島根県 大森 孝華

反抗へ悔いを承知の負け嫌い

金策へ一息入れて越す峠

神戸市 来住 タカ子

二次会で心の奥の扉を開ける

罪一つ過去の面がはずれない

松江市 村松 酔歩

病妻へ目立因果な職となる

ドン帳へ役者血で繕ぐ芸をもつ

札幌市 平野 青夜

出来心だよとマッチを仕舞い込み

云い訳を考えてから酒を飲み

島根県 榑原 秀子

音楽会ロマンチストになるムード

イメージチェンジ年を忘れた日の鏡

下関市 志賀 汀花

青い目へ単語ばかりで売るズボン

貸ゴザの貼紙もして花の寺

河内長野市 井上 喜醉

虎の子が男の顔を立ててくれ

押し売りへ器用な返事妻は持ち

大阪市 藤田 頂留子

伊賀上野室生寺長谷寺周遊(二句)

ハイウェイ大和平野を真つ二つ
コンクリート一枚地獄の上に住む都会

河内長野市 森 本 黒 天 子

平凡なところは息子も負けていず

平凡は無病息災鼻にかけ

池田市 石 井 文 五 郎

手袋を一つ落して彼岸来る

吊革を噛みつくように大欠伸

竹原市 簗 田 浄 美

カーブさえまっすぐ駆けている自信

もてすぎるあなたへすねた瞳を伏せる

愛媛県 燈 本 満 子

ちぐはぐな心がこわい夫婦箸

質よりも数が自まんのしつけ糸

竹原市 岡 元 春 昇

助手席へ女を乗すと出るスピード

悪運が栄え近所と付合わず

羽咋市 三 宅 ろ 亭

碁敵へ挑むに都合よい小降り

残された核家族バナナ分けて喰い

愛媛県 小 笠 原 仲 美

一本のビール平和な日が暮れる

やるだけはやった満員夕焼ける

羽曳野市 麻 野 幽 玄

冬堪えて来たのに雑草引抜かれ

積残す程へまばらの対行車

八幡浜市 別 宮 す き

調和がおくれ進歩が事故をよび

戦争で運命向きをかえたまま

米子市 増 田 竹 馬

総入歯妻の歯痛をあざ笑い

ド忘れを笑い飛ばして古稀達者

神戸市 横 山 孜 孝

無礼講思わぬ人の喉が聞け

パン食がそろそろ恋し里帰り

愛媛県 西 田 夫 常

春闘だらびもひげの拳揚げ

外孫は年玉取る間祖父の膝

兵庫県 高 橋 近 江

何も彼も終わりましたとベレー帽

ワイシヨイと中味も何んにもないミコシ

大阪市 河 原 林 比 呂 路

ちっばけな喜び花のある生活

増産と減反も金の要る政治

東大阪市 坂上山椒坊

スモン病

ルンペンの体力羨やむ車椅子
気休めの薬と患者知って飲み

東大阪市 落合思月

痴漢でも良いから相手はしくなり
意外にも反対だった父が折れ

今治市 古野伶人

伝米の門を壊して車庫を建て
買うことは儲ける妻に逆らわず

岡山県 武内雅堂

老妻の背を流して風邪をひき
ぜいたくな暮しへ母が寄りつかず

寝屋川市 富隆子

敷金も割かん娘等結婚す

結婚の娘の荷の合間で親は寝る

貝塚市 行天千代

三つ子にも有る反抗は道へ寝る
嫁の勝気老いの行末案んじられ

新宮市 大矢十郎

病診て悩みは見えぬレントゲン

終着の愛か無言の老夫婦

八尾市 飯田一治

暗がりを女と歩くに訳があり
看護婦の傷に病人心配し

広島市 植田英詩

爪染めて女の業が媚びている
倦怠期靴を拭うて出るとする

島根県 志賀美栄

物価高野草に春をかみしめる
老眼鏡二つ並べてお茶にする

倉敷市 竹内翁童

金持のグチスケールがちがいすぎ
用もないネオンの波に足が向き

岡山市 谷森和風

プライドを保つ一人が妥協せず
免許証取って心配ごとがふえ

出雲市 竹内李朋

焦躁の反復試歩がまだつづき
辞書ひいて歴史ドラマについてゆき

守口市 岡原達夫

ながいきはするもんやナなあみニ姿
人たかりのぞく時には腰がのび

高知県 山川勝子

金魚さえ春の姿で尾を振って
母の日に母有り五〇の有難し

仙台市 川村映輝

火事現場先ず真先に風がくる

町長と議員が待ってる新市制

鳥取県 近藤秋星

百姓は家畜の糞にも気を配り

ナイターが又始まった妻の愚痴

伊丹市 春日青争

日ッ本一臭い川原へ春の雨

タレント歌手春の息吹きとおだてられ

高槻市 山田スミ子

月賦でもよいと話せばチト迷い

顔の艶賞めて見舞の客は去り

大阪市 田中多幸

消火器の試験のようなボヤですみ

雛人形孫と眺めて昔語り

大阪市 鈴木生仏

宇治育ち茶粥啜った友は減り

万博で世界が小さくなって来た

守口市 樋口一峯

其の昔此の親にして此の子有り

大阪府 岡本まさひろ
男性的な海岸に今日女波

鳥取県 林露杖

仲直りさせて孤独の夜にかえる

泉佐野市 大工静子

加害者うそぶき被害者うつむき

浦和市 吉岡茂

化粧品セールの手が荒れていた

今治市 原田輝親

まあこれが皆口ハの口九千人

大阪市 平井露芳

永平寺

修行僧客へも祈ってガイド終え

鳥根県 東原福子

夜桜のどよめきよそに皿洗う

竹原市 楠貞子

或る日妻テレビドラマに似た素振り

竹原市 楠美佐穂

多過ぎる良書一先ず浅う読み

善通寺市 伊藤歌子

笑顔の学童横断橋のわたしぞめ

鳥取市 藤本佳女

住み馴れて同居の窮屈さにも馴れ

鳥取市 藤

本 恵 子

活け花は直すたんびに小さくなり

大阪市 今

井 隼 人

遅刻した弁解母の風邪ごもり

鳥取市 藤

本 和 宏

雛祭り孫のお客の行儀良し

大阪市 吉

野 志 津

目の悪い母へウズラの卵買う

鳥取市 藤

本 鎮 也

年輪をかくす化粧の姥桜

大阪市 村

島 秀 村

遅参した大物決議をくつがえし

笠岡市 山

本 柏 生

お婆さんの日向ぼっこも春姿

大阪市 花

田 繁 子

公約の減税の額当てにせず

竹原市 生

信 笑 子

千金の雨と呼ぶのも一夜だけ

大阪市 広

畑 賛 平

過去すべて打ちあけにくい星が降る

和歌山市 田

中 正 夫

お供物欲しさに孫は手を合わせ

大阪市 岡

部 シ ゲ

言論の自由三言も多い妻

和歌山市 吉

野 富 子

一人よく百人余りを救い出し

大阪市 松

岡 進

子等の瞳は何か企らむ四月バカ

名古屋市 吉

田 文 枝

きびしさも知らず若さも物足りず

西尾 葉句集

仮題

「水鶏笛」
くいな ふえ

近日発行

還暦の年に想を練り、川柳生活四十年を自祝し、あわせて恩師故麻生路郎先生に捧げる意図をもって、来る七月七日の路郎忌を期し発刊することになりました。

俳句から川柳に進み、元不朽洞会理事長として活躍、常に眼鏡と髭で親しまれ、温

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社

嗚呼

紋太先生

橘高薫風

「温和な人でしたなあ」というのが、三才代の相元紋太を一口に云い表わした、これも当時三才代であった麻生霞乃女史の言葉である。大正十三年川柳雑誌が発行されて間もなく昭和初年鳴尾の遅日荘での柳談会に出席していた時代の紋太は、川柳への斗志や情熱を内に秘めた口数の少ない控え目の作家であった。

「まるで昭和の柄井八右エ門だ」というのが紋太の晩年を病床に見舞い辞去した時の中島生々庵主幹のつぶやきであった。この間四十年の歳月が流れている。

本名文之助、明治二十三年十二月六日神戸市に生る。昭和四年六月ふあうすと川柳社を組織し主宰。昭和二十六年文化の日、兵庫県文化賞受賞、これを記念して翌年三月一日作品評論随筆集「わだち」出版。昭和三十七年六月中旬、高血圧動脈硬化症と軽度の眼底出血のため病臥、八月号から一日一句抄、つまり病床吟の発表がはじまる。これは翌年五月号ぐらゐまで続き以後少時中断するも、巻

頭言や「私の手記」など執筆は続いた。その間病状ややあらたまり絶対安静を強いられれた時期もあり「せつ代筆」とある号もある。句は、三十八年十一月号に「M・S句帖」、四十年一月号からは「聞多枝折」同年七月号から「一棒集」とタイトルは変わるも発表を続け四十二年頃からは毎号五十句乃至八十句と多量に出現、ふあうすと誌のみならず全国各誌上に紋太の句が掲載されるようになった。四十二年五月紋太句集発行、七月号、八月号には紋太作品がいくつもダブって発表になっており、こんなことにも老いと病み疲れがひしひしと感じられて痛々しい思いをさせられる。四十四年七月六日ふあうすと川柳社創立四十周年記念川柳大会が開かれ、出席者三百四十余名、紋太のメッセージを川上星花が代読深い感銘を与えた。病臥以来月に一度以上見舞っていた竹沢鶴鷺の死や房川素生の急逝には殊にショックを受けられた様子であった。長い病床での生活では、見舞い客との歓談や手紙類のやりとりが唯一の楽しみであったらしく、左手で書かれたというふるえる文字の葉書は多くの柳人に畏敬の念をすら起こさせた。句は身辺雑事、常任生臥の境地を柔軟性のある表現で補い、所謂紋太調といわれるものを確立したが「川柳は人間である」との主張通り、紋太の生地がそのまま表現されていた。「いい家主だが家賃また上げなさる」四十二年四月号に発表の句だが、これは「いい家主だが家賃また上げくさる」だったのを原稿を送った後どうにも気になって編集部宛訂

正を申し入れられたなどの話は紋太の人間性を物語っている。八年間の斗病生活とその間も休まぬ執筆への執念は、紋太の強靱さを物語るものであるが、それは、川柳の質的向上と社会化運動に心血を注いだ数名の巨星の最後の光茫であった。五月五日神戸春日野道の高法寺で営まれたふあうすと川柳社葬で参列者に配られた原稿用紙が相元紋太を象徴していた。

電熱器にこつと笑うようにつき
財産の中の異彩は手風琴
正信偈教えてくれた父恋し
病者用海苔のカンから飴が出る
永く病み妙な時刻に灯をつける



味 伝 統 の 磨 かれた

司 子 集 柳

幡 八 屋 鶴

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
支店・各百貨店のれん街

抄 輪 九

松原市 谷垣史好
 度の強い眼鏡が春を重くする
 透明ないのちとなつて昇天す
 シュークリーム朝のセックスにも似たり

今治市 月原宵明

目をふせて春の推理のとめどなし
 行くあてはなしポケットの裸銭

倉敷市 小野克枝

ヒントだけ置いて合鍵持つて行き
 妊りを書く始末書に印が無い

大阪市 小谷葉子

恋う人のあり春草に導かれ
 一輪の百合にひかれるのも

おんな

岡山県 直原七面山

断崖に立つても女ポーズする
 娘らと旅心経痛のこと忘れ

松江市 津川紫吻

異動評適材なきにしもあらず
 妻に留守預かる日あり卵割る

愛媛県 渡辺曉童

春雨は泉水にきくものに出来

平凡な直角が抜く五寸釘

下関市 志賀木石

嫁がせてから勤行に念が入り
 梅雨の漏り甲斐性なしの枕許

小松市 馬場魚山

老杉が舞台半分ずつに観せ
 いじ悪が寝たか豆靴裏返る

竹原市 森井菁居

仕方なく開く核も入りまじる
 酔うだけは酔うて決意がつかぬまま

倉敷市 水粉千翁

五線譜の無い哀歎の歌に酔い
 すりきれた絃で弾いてるのよ

広島県 岩谷二三枝

攻防の接線となる風紋よ

島根県 小砂白汀

スモッグに花は歴史を承けて咲く

大阪市 有信新之助

蟻の列にかがんで蟻に無視される

和歌山市 垂井葵水

退屈な昼の女を狙ってる

大阪市 大坂形水

過密都市川は消されてゆくさだめ
大阪市 江城 修史

倅せかなどと愚問のレモンティ
富田林市 岩田 美代

額縁におさまり切らぬ想を練る
藤井寺市 西 いわを

ペタルころろと生活のリズムあり
松江市 岡崎 祥月

人妻をほめて晩酌 座がしらけ
島根県 錦織 文子

プロだから前に出る声もとめられ
大阪市 正本 水客

妻はもう着かず離れず争わず
羽曳野市 麻野 幽玄

時間だけを平等に与えた神はケチ
松江市 柳楽 鶴丸

日曜日パパおトイレで唄ってる
大阪市 白石 良圭

青空も人間様に見られたい
大阪市 神谷 凡九郎

この危機に逆立ちしろといわれけり
富田林市 浅川 八郎

童心にかえった妻のリバイバル
岡山県 武内 雅堂

そっと指 桜の蕾こわれそう
島根県 堀江 正朗

気まぐれか本気が蟻は向きを変え
下関市 桜川 不水

ご飯粒夫は安心してこぼし
島根県 堀江 芳子

氷雨降る そっとひろげてみる手相
岡山市 川端 柳子

髪を梳く後姿も 女老け
竹原市 三宅 不朽

子にあまえられるステキな父なりき
桜井市 岩本 雀踊子

猫の死が平和なだけになおショック
笠岡市 出原 真奇

五分ほど娘気にする凶のくじ
大阪市 阪上 十止庵

赤飯の貰い当てにし米を研ぐ
小松市 四方天 弘実

百円で二個の玉葱買いしる
東大阪市 竹中 綾女

選 柳 白 水 清

子の知らぬ両親だけの記念の日
八尾市 鶴声庵 覚然坊

絡まれる方もしこたま酔うており
鳥取県 西川 洋々

馬鹿らしい農産物は他人が決め
鳥取県 今村 夕路

「月の石拾い」君はそんなにおもしろいか
豊中市 戸田 古方

狂人に生命の主導権奪られ
出雲市 王 紫

乾髪に鱗光らせ寡婦稼ぐ
岡山県 出原 敬一

勞資激論 白夜の顔となりぬ
守口市 羽原 静歩

塹壕のマンガへ兵士還らない
八尾市 高杉 鬼遊

壁画を見る女の執を言わねばと
堺市 墨作 二郎

耳ふせてみても貴方の声がする
竹原市 生信 笑子

ゆれている炎 私はもう泣けず

愛憎の亀裂へ蒼い虫がはう
神戸市 来住 タカ子

雑沓の中で偽装の恋を脱ぐ
姫路市 前田 芙巳代

背信の密語を盗んでいた時計
雪崩まつ その冷ややかなたかぶりに

ジェット機がとぶと群衆風化する
富田林市 定金 冬二

白旗にかけて疑いもなく夫婦
知恵の輪の中へおんなが落ちてゆく

悼 紋太先生
大阪市 橘高 薫風

銀泥の般若心経 即紋太
肅然と猥歌を聞きぬ 妻病めば

六月の雨の奥なる人を恋う
清水 白柳

紋太先生におくる
わしひとり来たよと仏様に告げ

緑雨逝く
目立たない星のひとつが消えしごと

柳宏子さんの父君逝去
澄んだ眼にふたたび逢えぬ朝が来る

四月の出雲路は楽しかった、満開には少し早かったが、湯村温泉での鯉料理は美味だった。その夜の座談の折にも、翌日松江までの車中でも九輪抄のことについて多くの質問を受けたし、岡山の同人懇談会の席上でも九輪抄のことが話題になった。それは何故九輪抄という雑詠欄が突然出来たのかということと、九輪抄の選句に対する選者の心がまえがどうなのかということなのである。それについてお答えはしておいたのだが一応ここで書いておきたい。雑詠欄が一つ殖えた原因は私を遊ばせないという首脳部の意向からである。昨年三月から梅志さんのピンチヒッターで秀句鑑賞を書いていたが、それを近作柳樽の選者に交代で執筆してもらうことになったので私の手が空くから雑詠欄を持てと言われたのである。

大万の選句もあることだからと辞退したのだが好郎さんにハッパをかけられて持つことに踏み切った。そこで条件を出した

のだが、それは「同人、一般投句者を問わずどなたでも投句して頂けること。出来る限りの厳選をして発表句数を少なくする。二頁以内に納める」ということであつた。こうして三月号から発表することになったのだが、思いの外に多くの投句を頂いて選者の悩みは深刻なものになった。投句者の半分も全没にするのはつらいことである。併し選者としては作者と妥協することは許されないのだ、添削してでも発表したいのではないかと言われるかも知れないが、本誌には初歩教室もあるのだから、その方で添削してもらってほしいと思う。九輪抄は作品数は少なくとも粒選りの作品で埋めたいと願っているので場合によっては一カ月に十句位の時があるかも知れないと考えている。併し句稿をくり返しくり返し何回も読んでいると今月のように四頁近いものになってしまふものも止むを得ないことだと思ふ。今後の御叱正をお待ちする。

川柳塔社常任理事会（五月四日）

主幹から岡山同人懇談会の模様が報告された。本年度の同人総会は十月四日ときまる。

会場は以和貴荘の予定。

小松園氏のご病氣から、多久志、好郎、栗氏が小松園氏のかわりに秀句鑑賞を交代で執筆することになった。

路郎忌は七月七日午後六時。

同人総会は十月四日午後三時—二賞発表句会は五時半から。

出席—白柳・好郎・古方・生々庵・薫風・多久志・一三夫諸氏。

▼柳界短信▲

▼富士野鞍馬氏（東京都）亡妻の一周忌回向を京都でしました。五月八日発信——一周忌ですと早月が咲いている——鞍馬。

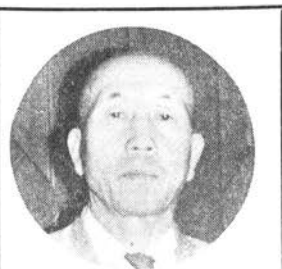
▼若柳潮花氏（高槻同人）浴衣会の話が出るゝとまた忙しくなり、句会にも出席したいとあせるのみですと。

▼福島鉄児氏（門真同人）足をねん座して内出血、歳をとると運動神経がのろのろしていかせんと。

▼永田六電子氏（大阪市）宅に電話開通（〇六）三五二—三二九二番。

▼川柳北上吟社主催、岩手県川柳大会が六月十四日午前十時から、北上市常盤台北上市民会館で開催。題は気骨・ピンチ・しめくくり・拳・動く・村・声・駐車場。投句締切は六月十日。投句料二百円—岩手県北上市本通二（郵番〇二四）川柳北上吟社。

▼工都叢書（一）金山英子著、句集「髪」頒価百円。著者は神戸川崎病院村田分院へ入院中である。発行所・尼崎市昭和南通八の二—二、大西石尾。



写真は故橋本緑雨氏

橋本緑雨氏逝く

麻生 葎 乃

橋本緑雨氏の告別式は昭和四十五年四月十六日午後四時に終了した。当日の夕刻、清水白柳氏から「緑雨さんが亡くなられました」という知らせがあった。告別式には参列出来なかつたが、私は彼の訃を耳にするや、だまって眼を閉じ、「どうぞ、安らかに眠り下さい」と幾度も心の中で繰り返した。それは私の心から迸る最後の感謝のことばでもあった。

橋本緑雨氏は「川柳雑誌」創刊号から路郎の片腕となつて骨身を惜しまずに働いた人だった。彼は編集者ではなかつたが、北陸の人に見る不撓不屈の精神の持ち主で、あらゆる障碍を乗り越えて、川柳雑誌の経営面をスムーズに運んでいった人である。又無口で目立たない存在の彼には内面深く根をおろした闘志もあった。「川柳雑誌」のP・Rになるものは細大もらず、目をつけて実行していた。日本橋の古本屋公立社へ行くと、そこは店主が私の顔を見て、「緑雨さんという人は

川柳雑誌社にはほんまに良い番頭さんだな」といったことがある。

緑雨氏は空中楼阁派の人ではなく、何事も即決主義で、すべてが事務的であつた。投句という風なルーズな事は嫌いらしく、良くても悪くてもおかまいなしに、毎月きまつた句数を提出する人であつた。雑誌社へ来る彼の通信は電文そっくりで、無駄な修辭はかけらもなかつた。お互いの言葉のやりとりにも彼の場合には少しの調味料もなかつたので、持ち前の無口を一層ぶつきら棒にさしたのである。然し編集部の人達からは信任が厚かつた。

それは不言実行の人だったからである。当時川柳雑誌は鳴尾にあつた。大きな柳の木のある路郎居を人はみな遅日荘と呼んだ。「遅日荘留守で四十五銭損」という楽屋落ちの句があるように、川柳雑誌社を訪ねる人は四十五銭を阪神電鉄へ払つたのである。この遅日荘へ緑雨氏は本職の非番の日には必ず顔を出

してアシスタントを務めた。私は子供の世話に追われていたのでその頃は雑誌にタッチしていなかつた。杭全町へ編集部が移されてからは編集部のサービスは万事緑雨氏の御厄介になつていた。路郎と緑雨氏との中を裂くようなデマがあちこちに飛んだこともあつたがお互に信頼していた二人は疑い合うこともなく、着々と仕事は進んで行った。もし途中で挫打していたならば、「川柳雑誌」はとうの昔に消えていた事であろう。彼は「街の雑音」という句集をたつた一つ残して世を去つた。職業の上にも、趣味の上にも、責任を果し得たという満足感を抱いて永遠に眠る彼の僥倖を寿ぎながら、私は終生忘れ得ぬ彼の冥福を祈るのであつた。

緑雨氏を悼む

北川 春 巢

橋本緑雨氏、名は与作。明治二十五年九月二十五日生れというから、満七十七年七カ月の生涯であつた。生地は石川県石川郡（現在は金沢市）である。そういえば緑雨氏には北陸の訛があつて、披露の際にも折角の名句がもひとつ聞き取りにくかつた。エキ（駄）が

イキに聞こえるのだ。

生地の高等小学校卒業後大阪に出られて、大阪市電気局電気鉄道部(現、大阪市交通局)の車掌に任命された。明治四十四年五月のことで。年令でいえば二十才というわけだが、卒業後上販までのことは分らない。しかし言語の形成は十四、五才までに完成するといわれているので、いまだに訛が残っていることを思えば、その間にはやはり郷里におられたであろう。もっと若い時に上販しておられたら訛は抜けていた筈である。あの発音で停留所名を喚呼しておられたかと思うと、何となくほほ笑ましい。

大正十一年には運輸監督になられた。市電の乗客は奇妙な発音の喚呼を聞かなくてすむようになったわけだ。氏の川柳活動もその頃から始まったらしい。初めて句会に出席されたのは大正十二年二月とこのことで、番傘の句会だった、との記録がある。その二月の「二」をとって「二柳子」という雅号をつけられたのは本田溪花坊先生である。(これは先生ご自身から伺った)交通局の中に「以交会」という会があり、主としてハイキングなどを行っていたが、緑雨氏が会長になられてそれがいつしか川柳吟行に変わり「みをつくし」という以前からあった機関誌を句の発表の場とされていた。「みをつくし」は大正十二年十二月号(第二十七号)まで続いた。

私は緑雨氏のことについてはあまりよく知らない。私が交通局病院に就職したのが昭和二十六年であり、緑雨氏が交通局を定年退職

されたのが昭和二十四年だったから、交通局ではすれ違いという恰好だったからである。しかし、緑雨氏のお名前は川雑誌上で大先輩として承知していたし、交通局の句会へも、大会などの時には必ず顔を出して下さったので、交通局川柳部の部長だった私は特によく応待した。だが氏の口はなかなか固く、前に述べた訛もあり、親しく語り合うということとはなかった。

緑雨氏が初めて出席された句会は、前述の番傘句会だったが、すぐに路郎先生の人柄と句とに魅せられて、先生に師事するようになられ、大正十三年、「川雑」創刊の際にはその役員となられ、以後川雑の幹部のひとつとして終始された。川雑四百号記念大会の際には(昭和三十五年九月)、創刊以来の功労者として川柳雑誌社から感謝状を受けておられる。「川雑」の血を引く本誌とも深いつながりがあるといえよう。今やその人を失ったことは本誌の、いや大きくは柳界の大いなる損失であり悲しみである。

緑雨氏は縁の下でコツコツと仕事をする人で、あまり表面に出て目立つ存在ではなかった。しかし、昭和十一年には(六月二十日刊)、「街の雑音」という句集を出版しておられる。路郎先生の選になる句であるが、これにも「拙い句ばかりで」と自序で謙遜しておられる。句集には当時の路郎先生ご自身の句を思わせ

るような句がたくさん並んでいる。

また柳書を多数収集せられて、昭和二十三年十月には所蔵の「柳書目録」を出版されたが、それには明治・大正・昭和の柳書三八〇冊が収載され、その編著者名、書名、発行所、発行月日、定価などが記載されている。なお本書の追補として、同年十二月、三九冊、翌二十四年四月、五一冊、の柳書目録を出しておられる。これも立派なお仕事である。氏の川柳に対する情熱も窺い知られるのである。なおまた、これらの柳書は、路郎先生のご提唱になった「川柳文庫」のため、昭和三十七年三月十四日、大阪市立中央図書館へ寄贈され、現在では一般の人々に供覧されている。これも余人には真似のできぬことである。

最後に氏が「二柳子」から「緑雨」に改号されたいわれを、聞きおぼえながら紹介して

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



氏の性格を回想し、そのご冥福を祈ることにしよう。改号は昭和五年二月のことである。

「緑は登山趣味を表わす。静を愛する心境である。大雨に打たれて抵抗する静かさ。小雨に煙る夢のような静かさ。その静である。雨はまた万物をはぐくみ育て、くまなく大地に泌みて、大地を固める。この「緑」と「雨」とをつないで、緑雨とした。」

氏が登山を趣味とされたことは、ここではじめて出て来たが、富士山をはじめとして白山、白馬、立山、焼岳など、かなり多くの山々へ登られた記録があることも付記しておく。

合 掌

（本稿は、本田溪花坊先生のお話や、福島正則氏に負う所が多い。）

緑雨氏を偲ぶ

清水 白 柳

川柳雑誌社の柳翁忌句会の会場、南区清水町端ノ方の二間続きの手前の方に受付けの小机があった。大阪へ出て来て一カ月も経っていないので都会の句会の様子がわからず、ウロウロしている私に出席者名簿を出してくれ書くことを教えてくれたのが当時は二柳子

だった緑雨である。名前を見てすぐに話かけてくれて心強かったのを覚えている、それが緑雨との初対面だった。大正十三年九月二十三日夜のことである。同じ石川県人（緑雨は金石、私は小松）ということもあったのだから川柳家同士という外に何かと話題があつて心安かった。

川柳雑誌四〇〇号特集座談会の時に緑雨が古びた一枚のハガキを「どうだ珍らしいだろう」といって私に見せた。そのハガキは私が初めて緑雨宛に出したもので叱驚した。四十年も昔に書いた自分の字を見て、やっぱり昔から字は下手だったんだと改めて感心したので、宛名は「大阪市西区八条通り南小路、橋本二柳子様」私の住所は神戸市多聞通り一丁目六〇安井方となっている。考えて見ると半年位い居たと思うが下宿屋のようだった。勿論一銭五厘でスタンプは十三年十二月十七日、昭和ではない大正である。内容は「昨十六日は休みなので川柳雑誌社へお伺い致したいと思ひ、鳴尾で下車して前まで行きましたが丁度おヒルでしたので入る勇氣もなかつたが大阪へ行きました。先日小松の村井津子路君から川柳雑誌社の支部を設けて呉れと、大阪の二柳子さまから手紙が来たといつて寄越しました。けれども御存じの通り小松にはその支部を統一して行くだけの力のあるものがありません、もし設置してもすぐ止めるようでは御社の手を掛けるだけです。尚一度考えて見たいと思ひます。一度御話致したいと思つておりますが段々忙しくなるの

で困っています下略」というもので私も若い時から出しやばりだったのに呆れた次第だがいつ川柳を止めるかもわからない男のハガキまで几帳面に残していた緑雨の性格を改めて見直したのであった。

私が北区野崎町（現在のよみうり新聞社のある少し南）で世帯を持った当時昭和五年頃天神橋筋で南森町の電車通りを北へ入った西側に岩垣奇可愛（後の日本村）の店があつてその二階で句会を開くから来いと緑雨にすめられて出席したことがある。その時の互選だったと思うが、緑雨のあのボシヨボシヨボシヨという披露には弱つた。披露の仕方が悪いからオレの句に点が入らないじゃないかと腹を立てたりしたものだ。例会であれ大会であれ、緑雨の披露には少しの変化もなかったもので若い連中は皆ボヤイたものだ。そして邪魔くさそうに協取りへ句箋を渡しても表の姿が目に見えて浮んでくる、緑雨はどこまでも表に立つて仕事をするタイプではなく、こつこつと縁の下の仕事に生きて来た男だったといえる。

緑雨の古柳書集めは大したものだった、よく目録を作つて欲しいのがあればいつてこいと知らせてくれたが、私はその時代は川柳書どころではなかったので返事も出さずにいたが、今となつてみると何故もつと手に入れたおかなかつた残念でならない。葎乃先生からお頂いた古雑誌の中に、二柳子の名前が入つた台本が何冊あったのでそれを今は大切にしている。すゝむさんが亡くなられる二、三

年前に私と二人で緑雨を訪ねたことがある、それはすゝむさんが探して居られる古柳書がまだ緑雨の手にあるというので見に行つたのだ、確かにあったのだがその後のことはどうなったのかは知らない、お二人とも亡くなつてしまつた今では知りようもないし、また知りたいとも思われない。

二柳子を緑雨と交えたのは昭和五年頃である。昨年二月号の雅号ぶっちゃけばなしで、二柳子という雅号は大正十二年二月二日に、本田溪花坊先生につけてもらつたとハッキリ書いてある。その二柳子が芦穂等と川柳に交吟社を発展的に解消して、路郎先生の川柳雑誌発刊に協力するようになったイキサツは、亜鈍著詩川柳考の橋本緑雨論にくわしくのつているのでここには触れない。

緑雨の句には派手さがないので目立たないがしつくりと心に残る句が多い、川柳雑誌の創刊当時ハガキ型の川柳宣伝紙を作りマンガ入りで同人の句をのせてバラまいたものだがそのなかにいまもハッキリ頭に残っているのが二柳子の句で

ポストまで行くに丁稚は犬を連れ といふのである。また作者は忘れたが
踏切で故郷行く汽車に丁稚あい といふのもあった。

ひとり静かにこの世を去つて行つた緑雨、黙々と粘り強く歩きつづけるであらう緑雨がもう路郎先生のおそばへついたらどうか。川柳塔のことも話題にのぼっているだろうと眼を閉じて緑雨の姿を追っている私である合掌

橋本緑雨句抄

みおつくし

大正十二年十二月号から

遮断機の下から犬は通り抜け
仏壇の前で母親座らせる
床屋から来た頭のいい匂い
利息だけ払つてやつと春になり
川柳雑誌創刊号 から

藤棚へ春が来てから暗くなり
一銭を握つて給屋追つかける
里がえりだんだん森が近くなり
句集「私達」から

池の水枯葉ばかりの底を見せ
法要にすわりなおして灯を眺め
葉の落ちた音も火鉢で聞いている
別荘の話マスクの中で云い
上かん屋顔をも見ずに酒を酌ぎ
こんなもの買わされますと婦人会
雨の宿山を眺めるばかり也
水道の音で書留またされる
夢にでも話に來ぬか三回忌
面影がさらず敷居にけつつき
ミスボリス視線をさけるとここに立ち
初詣り賽銭を踏み足を踏む
悪人になれず金庫の番をする

緑雨氏の葉書

不二田 一三夫

緑雨氏の句稿はいつもハガキだった。昨年

七月号までは毎月送稿してくだつたが、八月号は休まれ、九月号には、
ここがよろうと極楽の近道

ほか三句投句されてからバツタリとだえてしまった。お見舞状を出したがご返事はなく、不吉な予感をもちつづけてきたものだった。ハガキの文字がだんだん読めなくなつて、グンと左へそれで句が弓なりになっていることもあった。

それでも句を送つてこられた。ヒシと鬼氣が迫る思いがした。やっぱりこの人も川柳の鬼だったのであろう。

旅行・宴会・リクリエーションの
ことならどんなことでもご相談くだ
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

ウ イン ク

中村 ゆきを 選

ウインクに抵抗もなく引摺られ
まばたいて蛍光灯の息が切れ
ウインクを覚えて保育所から戻り
ウインクへふっと忘れた妻の顔
ウインクを見逃すからの仲となり
大望のまえにウインク寄せつけず
ウインクですぐに通じる仲となり
憎らしいというウインクを受流し
孫のウインク両眼ともつぶ
階段でウインクされた御用聞き
ウインクでバトンタッチをする小言
イーとして目がウインクの瞳に育ち
皺の中に昔のウインクまだ残り
営業用ウインクとして濫発し
ウインクを交した女降りた駅
ウインク一つ世界が動く恐ろしさ
ウインクが黙殺されたよなそぶり
ウインクをしても鏡の中はボク
ウインクで会う約束の出来る仲
ウインクをすればウインクと答え
ウインクもして初恋を育てあげ

いわを
きよ
秋女
十止庵
秀峰
双楽
綾女
芳仙
どんたく
雅堂
利美
新之助
初甫
宵明
近江
鱗魚
文一
柳子
弘朗
祥月
藤波

恥ぢど一度はしてみたいウインク
ウインクに気づき毒舌にぶりだし
素晴しいウインク男の骨を抜き
ウインクをしてもされても十八九
ウインクが通じぬような奴に惚れ
ウインクもエッチもおばえ孫三つ
ウインクを合図に席を立つ二人
宴会を抜けよとウインクして知
ウインクを女は武器として磨く
追い返せとも云うウインクに困り
ウインクはまだ下手くそで美しい
ウインクはOKすつと席を立ち
ウインクは遠い記憶でよみがえり
うちの娘も思春期ウインクを平気

佳

ウインクに女はそれとなく答え
ウインクが姑の肩を越してくる
ウインクへ男は年を忘れたり
ウインクをして看護婦をツンと
お隣の人形ウインクして通り

人

ウインクをされてどうも出来ぬ歳

地

ウインクを二人一緒に受けとめる

天

ウインクにウインクをしてさよなら

軸

克枝
素身郎
里風
一親
輝郎
曉童
曉風
佳女
千翁
同子
同子
同子
同子

平 凡

岡村 久志良 選

ウインクはあとで二階へ来いとど

平凡な男にかえる墓まいり
平凡な養子で可もなく不可もなし
平凡な話で相合傘通り
平凡か非凡かゲバを振らんんだ
九時出社五時退出で平社員
平凡な口調で人を外らさない
平凡が又捨てがたいなどとほめ
平凡な暮らしですと貯めており
大過とてあらず大成ともならず
平凡なスタートでした立志伝
平凡に生き定退へうろたえず
平凡に産んで非凡に育てる気
平凡でよいさと伏せる成績簿
凡妻の怒り凡夫をやりこめる
平凡な柄アイトするハイヒール
平凡な結婚でしたインタビュー
平凡な余生をみだす人に会い
秀才の妻へ凡夫の席がない
平凡に歩き通して来た天寿

曉明
勝子
初甫
藤波
宵明
扇水
文子
文一
鱗魚
一治
新之助
杜月
同々
洋々
露声
保夫
失名
雅堂
白汀

初歩教室

— 題「雨」 —

本田恵二郎

俄雨傘半分へ礼を言い 露 声

たった十文字で、面白くやってのけたよ。

独り居へ雨だれむなしの楽譜かく 一二三

どうやら愛妻がお留守らしい。可愛そうに。

花に降る雨が光っている別れ 克 枝

涙を溜めた目で見る雨はかくの如しだな。

雨の日曜日腹から目を覚し 春 海

まだねむいのに、胃袋めが容赦してくれず。

古都の雨塔を墨絵にして見せる 愁電子

京都や奈良に見られる好ましい雨の風情だ。

降り過ぎたおわびのように虹が立ち

句主の美しい感覚が、おわびと感じ取った。

この雨に濡れずに戻って疑われ 隼 夫

ホステスとご同乗だったんでしょ。

日曜の雨が飲み飲み飲めと言ふ 多 幸

この雨なかなか話せる雨だな。独酌とゆくか

無茶苦茶に歩いた雨の片想い 為 三

おまけにダンブに泥をはねられたり、嗚呼。

春雨じゃ濡れまいタクシー呼んでくれ

春雨じゃ濡れて行こうは、昔話となった。

満開をねたんで雨が風を連れ 肖 二

美しきものは、ねらわれる。風まで連れてね

野良犬と仲ようになった雨宿り 洋 々

野良犬だって雨はいやだし、恋人も欲しいよ

特価品へそれ行け雨に負けとれず 綾 女

悲壮なる突撃精神である。模範的賢妻よ。

雨の日も楽しからずや白髪抜く 大 吉

悟道に負け惜しみか。白髪抜く図は佳し。

雨の窓遠出の夫の顔浮ぶ 成 子

外は暗だ。慕情のとりこへ無慈悲な雨の音。

三日目はもう慈雨でなしうとまれる 仲 美

ご勝手なのは人間さまの方だと雨が申した。

より添うて雨にはにかむ若みどり 孝 華

新婚の睦じく若々しいご夫婦の姿が浮ぶ。

寝返りをなんべんしても止まぬ雨 静観堂

寝つかれぬ夜の心情をたくみに表現したよ。

待望の雨に公害洗われる 近 江

家も木も草も消毒するように洗われて、すがすがしさを取戻した。正しく慈雨だ。

思い出の雨は心に沁みる色 千 代

ハネムーンの宿の窓を叩く雨、ピンク色だ。

雨も佳し腹這いで読む樹一郎 勝 子

雨が与えてくれた落着いたレジャー振りだ。

とっときへ空が気になる雨女 初 甫

雨男は知ってるが雨女もあることを教えてもらった。とっときへ女心がにじんできいるよ。

客の持つ傘で地下街雨を知り 和 風

さげた傘のしずくの量で雨量が計れるばかり

か、雨宿的な客が売上げをふやしてくれたよ

添乳を夢へ誘った雨の音 要 次

漫画になりそうな構図だ。子の方は大きなお

目目をあけてるではないか。天下泰平だな。

取引の不調おまけに雨にあい 軒太楼

泣き面に蜂とはこのことだ。縄のれんでもく

ぐらぬことにはおさまるまい。

雷に前ぶれさせてどっと降り 静 子

風鈴に前ぶれさせた雨など愛すべしだが、雷

公の蜜声に前ぶれさせた奴などすご味がある

傘抱いて迎えた頃をなつかしみ 進

初々しい新妻が傘を抱くように持って、駅で

アナタを待っている。私だっとなつかしいよ

大安の雨は芽出度いものにされ 志 津

若本多久志 著

「親ごころ・子心」

送料六五〇円

「老いの坂」

送料四七〇円

お日柄もよく、地固めもよく出来まして、ほんとにお芽出度うさん。小母さんの口上手。子狐の嫁入りニッコリ雨が降る。まさひろ狐の嫁入りといわれる雨を、フィクションし

たらこんなぐあいになっただけの話さ。

村雨が山吹の歌作らせる 濁水

その日村雨が来てくれなかったら、道親といえども、あの歌は作れなかったであろう。

散歩好きゴム靴履いて傘さして 繁子

降ろうが照ろうが、いやはやご苦労さま。

雨宿りしたパチンコがついていず 雅万

その日パチンコがついていたら句にならぬが

幸いにもついてなかったで句が生れた。

雨乞いの声青空へ届かない 秀村

にくたらしくも青空はニヤニヤと笑つてる。

物干で隣りへ知らず俄雨 満津子

金切声ではない。ソプラノである。隣人愛よ

鼠小僧みたい雨漏り探し当て 儀一

漫画だよ。頬かむりなどして、屋根をゴソゴソ這いまわる。そして遂に凱歌が挙ったよ。

大きな瓶だよ琵琶湖雨を詰め 露芳

ナルホド全くだっかい瓶だな。鮎もいるよ。

スケジュール無情な雨に濡れ破け 保夫

紙は水に濡れると破けるものだ知らされた

容赦なく散らせ新芽を誘う雨 富子

エエかげんに散りなさい。あとがつかえてる

んですよ。雨がおごそかにおっしゃった。

片袖を濡し恋路の雨うれし 正夫

歌麿君の時代も現代もあまり変らぬな。

雨ボツリ井戸端会議あわてさせ 新之助

満艦飾を取り入れるには、亭主もボクもアタ

イも総召集せぬことには不可能である。お隣

さんも、そのお隣も、あわててござるよ。

事故零を願う女神も雨に濡れ 秋女

交通小母さんと愛称される奇徳な女性が、黄色の旗を振って、学童の安全通行を指導している姿を見ると、その愛情の発露に、頭の下

る思いがする。正しく女神像である。その像

が雨に濡れながら、温い微笑みをたたえ続けている姿に句主は感動した。私も共感した。

花梅雨へ桜散るよりすべがなし 頼次

散る花への愛情を、すべなしと叙したところ

がよろし。句主の心の温さである。

雨男なのと母に見送られ 金三

お前を雨男に生むつもりは無かったのよと母

の目は言っている。そして今日も元気でと祈

る母ごろがうれしく尊い。

走ってもゆっくりしても濡らす雨 すき

至極あたりまえのことを言ったのだが、そう

言えなくなるほどそうだなと思わせるから面白い。

ある悟りを感じさせるよ。

借傘を思い出させた俄雨 虎城

あの時借してくれた親切を忘れるともなく忘

れていたことを悔いている。反省している。

春雨にぬれてゆっくほど粋でなし 露杖

昔々志士などと呼ばれる男がいて、芸者にも

て過ぎていたらしいが、現代の思想からはい

とも遠いものとなつてしまつたよ。

タクシーをやつと拾えば雨が止み 慶彦

それでなくても拾いにくくなつた現代、雨の

日は増々拾えない。拾った時には雨が止んで
いるという皮肉も人生の苦笑だな。

花咲かせ花を散らせて雨の芸 孜孝

雨を芸術家と見たてたところが面白い。

橘高薫風著

れもん

送料共 五〇〇円

子の願い空しく濡れるテル坊主 翁童

純真な願いをあわれと思う親ごろだ。

てのひらで確めてから降つてます 利美

そんなかすかな雨を春雨と風流に呼ぶ日本人

雨洩りへたらいが主人顔をする 馬頭

ポトポトポト、にくらしい音だな。

新聞紙派手にかざして俄雨 シゲ

漫画のポーズだが本人は冗談ではない。

水仙よ伸びる伸びると春の雨 富士

雨に伸びるピッチを上げる水仙への愛情だ。

雨の道と服の裾をミニにする 生仏

それそれそんなに上げてはとハラハラさせる

宿の窓郷愁そる雨の音 誓二

雨降れば雨が情緒になるも旅―私の旧作だが

雨の音に何かを感じるのは詩情である。

題―煙―六月二十日締切(八月号)

岡山県倉敷市下津井三五二 〇七一

本田 恵二朗宛

大萬川柳

「良心」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 六百三十七句
 入選 七十四句

方便の嘘をつくにも口ごもり 太阪 あいき
 八尾 鬼遊
 風船の良心いさぎよく破裂
 貝塚 つき子
 良心を無視したタバコうまくなし
 宝塚 ゆきを
 釣銭が多い良心顔を出し
 堺 一步
 手ぬるさを良心的と弁解す
 大阪 滋雀
 職人の良心がもうひと鉋
 羽曳野 幽玄
 手土産はせめてもの詫び子の寝顔
 堺 千万子
 良心の強さ臆病とも云われ
 米子 瑞枝
 良心の過ぎる仲人でまともらず

羽曳野 友恵
 良心を示す機会のない不義理
 高槻 静馬
 付け落ちを仲居の身にも云うて
 大阪 美房
 良心に訴え捜査ゆきづまり
 神戸 どんたく
 良心よ妻よ許せと月給日
 富田林 柳太
 良心が僕の視線をまごつかせ
 和歌山 葵水
 良心のいらだち煙草にじり消し
 坂井 雀踊子
 良心を売れと銭の音がする
 熊本 芳仙
 良心があるから視線逃げまわり
 倉敷 三林坊
 良心のかげら慕参の旅に立つ

八代 史朗
 これしきの金へ良心目をつむり
 堺 茂美
 犬でさえ謝るしぐさ首たれる
 大阪 柳志
 突っぱねてきて良心がうずき出し
 倉吉 弘朗
 良心が強くて商人には成れず
 大阪 章雅
 良心の呵責妻ある人を恋い
 大田 軒太楼
 良心にうづく話を持つてくる
 大阪 大吉
 論争に勝って良心さいなまれ
 富田林 美代
 良心に念を押されて向きを変え
 東大阪 生長
 良心のない野次馬に煽てられ
 倉敷 千翁
 良心があつたと云えて悔いている
 倉敷 里風
 嘘つけばどもるくせあり細う生き
 倉敷 素身郎
 良心のままに動いて左遷され
 鳥取 恵子
 儲った日へ良心がちとがめ
 大阪 雅万
 良心が寝言にまでも詫びさせる
 大阪 富士
 良心にさからい列の前に出る
 大阪 新之助
 打ち明けた良心すらも蔑まれ
 大阪 弘生
 良心は硬貨拾うてもうずき
 倉敷 扇水
 良心が恥じぬ鏡を拭きつけ
 高石 好郎
 落ちぶれているから良心疑われ
 良心がひとりになってこみ上げる
 堺 草春
 猫の良心尻尾だけ残してた
 良心的やと客が客をつれてくる
 堺 天笑
 良心を見つけて刑事茶を運び
 良心の呵責鏡に背を向ける
 八尾 酔々
 良心の痛み二日もあれば消え
 欠勤の届けの嘘をちよつと悔い
 松原 史好
 二人きりになっても良心的な彼
 団体の気楽さ良心まで預け
 大阪 水客
 良心に恥じることなき肩たたく
 良心と向き合うてモデル立って

下関 木石

良心に妥協もさせて小商い
良心の恐さ時効のない呵責

笠岡 忠三

後戻りして良心が詫びを入れ
良心に聞いても社長の方が無理

愛媛 曉童

まっすぐな線路さんげの目が長い
良心の呵責にゆるい前鼻緒

倉敷 恵二朗

良心の診察遠慮なく叱り
空腹がふと良心を置き忘れ

島根 芳子

良心があっても意地が言わせない
問いもせぬことを良心みなしや

大阪 慶之助

こちらにはミスはないがと見舞金
良心はあるらし養育費だけは出し

藤井寺 吸江

やけ酒に妻子の顔が邪魔をする
良心的を褒め若いなと思ひ

うちの娘に似たホステスで酔もど

篠山 可住

良心がばやけて金が出来はじめ
良心がなくふるさとの星を見ず

良心のかけらが母にだけ応え

佳句

大阪 あいき

良心があるから酒のせいにする
倉敷 三林坊

篠山 可住

良心はあります金が無いのです
花も虫も人の良心信じてた

大阪 満津子

損をせぬほかは良心持ち合せ
掌を合わすとき良心の鼓動聞く

岡山 康明

人ノ句
せめてもの良心煙草を溝へ捨て

大阪 滋雀

良心が積み残されているホーム
天ノ句

八代 史朗

対策貧困ただ良心に訴える
松原 史好

好

集団となり良心をむしろばれる
選者吟

昭和四十五年度
ベストテン (五月現在)

一 史好 一一、〇 松原

二 天笑 一〇、五 堺

三 可住 九、五 篠山

四 吸江 九、五 藤井寺

五 扇水

六 利美

七 好郎

八 素郎

九 素身

十 千代

十一 静馬

十二 柳客

十三 三林坊

十四 芳子

十五 三林坊

十六 芳子

九、〇

九、〇

九、〇

八、五

八、〇

八、〇

八、〇

七、五

七、〇

倉敷

高崎

高石

堺

倉敷

倉敷

米子

高根

大阪

大阪

島根

十七 恵二朗

十八 滋雀

十九 ゆきを

二十 康明

二一 里風

二二 幽玄

二三 新之助

二四 慶之助

二五 史朗

二六 鱗魚

二七 曉明

七、〇

七、〇

七、〇

六、五

六、五

六、五

六、〇

六、〇

五、五

五、五

五、五

倉敷

大阪

宝塚

岡山

倉敷

羽曳野

大阪

大阪

八代

岐阜

大洲

以下略

昭和45年度第7回

「まな板」 5句以内

締切 6月20日

第8回 「レンズ」 5句以内

締切 7月20日

投句先

大阪府高石市高師浜3丁目5-6

郵便番号 592 川村好郎

季節料理・折 詰

大 萬

阿倍野区松崎町

TEL 63 5031・5032

南区豊屋町三ツ寺センター

TEL 24 9184

路郎忌句会

(七月七日)

ご宿泊の方は早目にお知らせく
ださい。会場で泊まれます。

☆ 柳 界 展 望 ☆



写真左から2人目・形水・好郎・三杯坊・
榮・白柳諸氏（國山にて）

▼川柳塔岡山県同人懇親会は五月三日（日）午前十一時から岡山市の岡鉄クラブで開催。本社から生々庵主幹をはじめ、好郎・形水・白柳・榮・薫風ら六名の常任理事が出席、世話人の久米雄氏を筆頭に恵二朗・久志良・あや子・葵丘・遠二・真奇・古心・仙山・一声・幽谷・素身郎・照路・柳子・克枝・梁水・里風・千翁・三林坊・陽子の二十一名の同人と和やかに歓談した。前後雨の虫明港松本楼で有志の交歓も行なわれた。相元紋太先生のふあうす

と川柳社葬は昭和四十五年五月五日（祭）午後二時から神戸春日野道の高法寺で執行された。川柳塔を代表して生々庵主幹が焼香、形水・白柳・故梅志氏令嬢あき子さん・静歩・薫風の諸氏が冥福をお祈りした。法名、広濟院釈普文。なお、本誌前号にて、紋太先生ご他界の日を四月十二日に、密葬を十三日にと報じましたが、それぞれ、四月十一日と十二日の誤りに付、謹んで訂正いたします。芸祭は六月二十八日（日）

橘 高 薫 風 担当

▼祝井上剣花坊生誕百年誌上大句会の作品が募集されている。兼題は、祝（曲線立歩・北村白眼子選）、剣（白石朝太郎・山中鹿之助選）、花（渡辺尺蠲・柿沼考人選）、坊（山村寛・石原青竜刀選）、生（大石鶴子・渡辺蓮夫選）、誕（中島国夫・石曾根民郎選）、百（山口古詩郎・中島生々庵選）、年（英徳三・堀豊次選）、記（直原那岐坊・水粉千翁選）、念（小田無限・大島濤明選）、各題二句。用紙は縦十五種、横四種のこと、即ち一題四枚と書く。会費は五百円、井上剣花坊誌（定価五百五十円）と記念誌を呈す。投句締切りは八月末。宛先は東京都杉並区和田一五九の五柳柳寺川柳会誌上句会係。▼柳柳寺川柳会では剣師生誕記念に、（井上剣花坊選刊行）、（誌上大句会（前掲））、（現代川柳結社表、四剣坊生存者句集刊行）、（剣花坊賞創設、（記念特集号刊行）法要、などを計画しておられる。

▼木幡村雲追悼句会は五月三十一日（日）午後一時から野崎観音で開催。▼第二十一回新潟県川柳大会は、第一回川上三太郎賞受賞式を併せ、六月二十一日（日）午前十時から新潟市の平安閣で開催。選者は大野風柳・石上弘法僧・小野悦郎・五十嵐さか江・中村富二・白石朝太郎氏の六人、投句は各選者に雅詠二句ずつ（同一句を禁ず）を投句料百円同封の上、六月五日までに新潟県新潟市私書箱第十五号新潟県川柳大会事務局宛。当日同会場で川上三太郎遺墨展が開かれる。

▼川柳さっぽろ百五十号記念川柳大会は八月九日（日）午前十時から札幌市北六条西二丁目国鉄クラブで開催。第一部の最優秀作品賞への応募は、雅詠三句。第二部の札幌市長杯争奪兼同人三氏古稀還暦祝賀記念競詠川柳大会の兼題は、ぶらぶら・どきどき・ぬるぬる・ばらばら・もくもく。第一部、第二部を通じて用紙は自由、各題別紙、住所雅号を明記して七月十日迄に札幌市白石町平和通九丁目南七、本田大柳宛。投句料は合せて二百円、但し一方

のみの投句にも二百円を同封のこと。第三部は川柳さっぽろ百五十号記念祝賀会。▼川柳きやり五月号は創立五十周年記念号として、昭和四十五年五月一日発行になった。同誌上より一九六九年度周魚賞受賞作品を発表。第一席 実印を押すと重たい紙となり

第二席 良い国にしたい 国旗を孫と揚げ 武蔵野人 添田 英子 第三席 善人の金は僅かな利子を生み 山口県 杉山 古山 五月一日、三氏に銀杯が贈呈された。▼清水米花古稀記念句会が五月五日（祭）正午から東京市川戸のレストラン桃太郎で開催。▼古川柳雑誌「ひるご」創刊号が三月一日東京都港区赤坂五丁目一の二六東南居H室交付付の二会から刊行された。定価二百円。難くは放っておけ・川柳見学・かわらけ考・幻灯柳多留などの内容。▼岡鉄川柳会が川柳後楽吟社として新しく発足し、後楽を四月一日発行した。▼川柳そのだ十周年記念大

会号が三月に園田川柳社から発行になった。
 ▼川柳「早蕨」第四集が三月十五日川柳さわらび会から発行になった。非売品。
 近江砂人・西村左久良・深尾吉則諸氏の作品にまじり、直原玉青画伯の川柳が掲載されている。
 平常心これ人生と覚えたり
 がまんして出来た見事な大我慢 玉青
 ▼石戸弥平川柳漫画展が五月二十二日から二十七日まで東京池袋の西武デパート七階催場で開催された。
 ▼清水白柳氏は八木摩太郎徳子ご夫妻、花岡花梢、伏見茂美、高橋千万里、高杉鬼遊、阿部柳太、吉岡通見

吉居奈々、岩田美代、林宏子、小谷葉子の諸氏と帯同、四月十二日のむらくと川柳会主催のさくら祭りに出席、湯村温泉国民宿舎清嵐荘に一泊、地元の岡崎祥月、柳楽鶴丸、小林孤呂二和、田維久子の諸氏と歓談された。正本水客氏も同句会に別途出席された。
 ▼石曾根民郎氏（松本市）は五月三日付の中日新聞「訪問」欄に登場、川柳経歴とともに、ふるさとを愛し、個性豊かな「しなの調」を確立した作家として紹介され、今秋には随筆、川柳、小断、それに文化年間の「田舎樽」の研究をまとめた一冊を出版する構想などを語られた。

新同人紹介

平野青夜
 生々庵・一三夫推薦
 竹内翁童
 素身郎・春日推薦
 川崎秋女
 名人・貞山推薦

▼直原七面山氏（岡山県同入）は岡山市の済生会病院入院加療中のこととて、岡山の同人懇親会に欠席、残念がっておられる。
 ▼野田素身郎氏（倉敷市同人）は四月一日、岡山県庁情報管理室に転勤、いよいよ多忙を極められていては岡山人懇親会の司会を担当が、今年下半に「川柳道場」の百号を迎えるので、目下意義のある企画を立案中とのこと。
 ▼川端柳子さん（岡山市同人）は、四月下旬、ご両親の墓参を兼ね四国路を一週間ほどで巡遊。
 「田舎バス メイ子の歌の客となり」

▼近江砂人氏（芦屋市）は五月六日秋田県角館の石川旅館から寄信をされ「散り初めといった桜の風情が何ともいえません。同じ部屋に一昨日幸田文さんが泊られたそうです。八幡平、牡鹿、飯坂、吾妻スカイライン、那須温泉などを一週間かけて巡遊、十二日帰宅します」と。
 ▼堀豊次氏（京都市）は京都市東山区五条橋東六丁目

四八九、京都府薬剤師会内へ転居。
 ▼丹波太路氏の八十歳の句集記念句会は九月二十日の予定。
 ▼鈴木もみぢ氏（千葉県）は「おもと川柳会」の主宰者。このグループには百三歳の諸田つやのさんはいっている。生々庵主幹がおくられた短冊に大よろこびのこと。
 ▼工藤甲吉氏（青森同人）は、生々庵主幹が七月に青森へこられるというので、今から待遠しいと。社から万博行きをすすめられたが孫が入院中で辞退したとの

若さとセンスのマツザカヤ



大阪天満橋
松坂屋
 月曜定休・電話943-1111

おたより。
 ▼高鷲亜鈍氏（広島県）の記事が関西文学四月号に出ている。盲人の詩人・藤村青一さんと僕と題して東淵修氏の筆である。
 ▼柳宴誌令二〇〇号記念川柳大会（併催野口北羊川柳作品揮毫展）四十五年十月十八日、会場日本生命保険ビル。岐阜市金町六丁目。夫人が五月初旬退院され、文秋氏もやっと句会へ顔を出されるようになった。

写真中央は生々庵主幹



岡山県下 川柳塔社 同人懇談会記

岡山県に住む川柳塔社の同人が追々ふえて来たので、一堂に会して懇談をしてはどうかという声が盛り上って来た。毎年十月には本社で同人総会が開かれるが、この総会に出席するのは少数の同人に限られている実情なので、岡山市に集まり本社から幹部の出席を得て話し合いをすれば親睦と意志の疎通が図れるというのである。発起人数名が二回にわたって打合せをすませ、五月三十一時から岡鉄くらぶに集合することに決定した。

五月二日夕刻岡山駅に着いたのは生々庵、

好郎、白柳、栞、形水の五氏、出迎えたのは三林坊、久志良、久米雄の三名。一行は直ちに宿泊地邑久町虫明の松本楼に向かう。三日朝恩師故古武先生の墓参をすませられた生々庵主幹を先頭に会場へ着いたのが十時過ぎ、当日大阪から直行の薫風氏の顔も見え、雨の中を同人続々と集まる。同人総数三十五名中勤務、家事、病氣などで欠席した同人を除いて全員出席、千翁の司会で定刻懇談会が始まる。

久米雄の歓迎の言葉と挨拶に続いて主幹から祝詞が述べられ、ついで出席者全員の自己紹介がすみ、宿題「塔」生々庵選の披露が終り三才五客には主幹筆の色紙短冊が贈られた引き続き懇親会に移る。すべての人が川柳を愛し川柳塔を愛するが故に発言の内容は真剣そのものであり熱意に溢れるものばかりだ。本社側からもこれらの発言に対し誠意をもって回答に当られたため、親睦と意志の疎通は十分に達成できたことと感ぜられた。そして

会のムードが明朗且和やかに終結したのは川柳によつて結ばれた川柳人同志の魂の交換が如実に発揮されたからであろう。お互い約束したこと諒解したことどもの数々を胸に豊ん白柳氏の音頭で「川柳万才」を三唱解散したのは午後三時であつた。

なお次の祝電を頂いた。
ご盛会を祝し今後の発展を祈る
金甲山の麓よりご盛会を祝す

田村 藤波
荻野 蛟虎 狼
(久米雄記)

宿題「塔」

中島生々庵選

ガイド嬢塔の由来も説いて呉れ
愛の塔大きくゆれた小さい嘘
驚孤独塔を見下し弧を描き
塔頂に羽を休めている平和
節くれた掌に金色の塔光る
一寸ずつ積まれた塔で崩れない
俗人の汚辱許さず塔聳ゆ
驚の輪の塔より高くまた低く
昏れ残る塔が夢二を語りかけ
つまづいて春と気のつく塔の影
春の雨塔の姿が生きかえり
ヤングパワー象牙の塔を積み直し
一本の釘もないのに塔が立ち
食いつめて今更塔を振り向かず
国宝の塔で雀が繁殖し
石塔に聞けばあの世も住みにくい
そばへ寄ればでっかい三重の塔
高すぎる塔で小鳥も近よらず
借景の塔に後樂園が生き
塔見えて編路の足は活気づき
塔の影斜めに歴史積み重ね
石塔の孤独へ時雨語りかけ
ふる里はよし国宝の寺の塔
人
ちぎれ雲五重の塔へ来て迷い
古都よさらば振向けばまだ塔が見え
天
塔のある景を絵にする遍路笠 恵二朗
(スベラスの都合で一人一句の発表となりました。)

本社 五月旬会

会場 以和貴荘

六日 午後六時

新緑五月は四月につづいて旬会部泣かせの月である。連休つかれがひびく——。

「せんば」の宜介主幹は毎月ご出席くださる。他社の方々と友情出席で旬会を盛り立ててくださる。うちの人がもうすこし多く出席していただくとうれしいのだが——。

柳話川村好郎氏は、岡山在住の同人三十五氏によって結成された懇談会の模様を説明され、これを機会に各地方でも、このようなバツアップがほしいと。これに関連して話題がひろがり、氏の絶妙の話術と相まって大受けであった。五月の月間賞は神谷凡九郎氏とさまる。(河井庸佑整理)

出席—与呂志・双葉・葛城・一舟・古方・凡九郎・儀一・一三夫・千万里・柳志・万的天笑・醉升・作二郎・静歩・水客・喜風・滋雀・トメ子・房子・形水・花梢・杜的・誓二圭井堂・静馬・新之助・尚二・綾女・柳宏子・徳三・鶴声・生々庵・勝暗・好郎・いさむ・鬼遊・修史・之保・維久子・一二三・吉太郎

薬介・夢成・宣介・凡吉・一治・季賛・金三
醉々・虎声・恒明・弥生・頂留子・庸佑・葉子

席題「有望」

墨作二郎選

雨馬場へ有望株は捨てて買い 万 的
有望視され過ぎ若さ見失しない 与呂志
希望燃ゆる乾盃のジョッキ泡のゆれ 生々庵
有望な男抹茶を二杯飲み 薬介
有望株そんな男で恋がない 一三夫
二代目がエスカレータに乗って来る 鬼遊
プラトニックラブで息切れするまど 水客
先生の一言ピアノ買い替えて 杜 的
有望株意外に口の重いひと 万 的
望みあるから馬の脚にも念を入れ 葛 城
有望な男がたたくドラムです 薬 介
猫の目のように有望変わり出し 静 歩
中年にして有望の肩が落ち 花 梢
有望視され鼻筋の冷たさよ 柳宏子
有望な男に虹は塗れないぞ 作二郎

席題「旗」

児島与呂志選

わらぶきに日ノ丸ローカルの旅装し 杜 的
旗雨に濡れても万博長い列 万 的
団体の旗見失なうまいとする 文 秋
ハタ立てる事も忘れている平和 柳 志
赤旗の抗議無視するコイノポリ 花 梢
横断路旗をにかけて園児ゆく 双 葉

スト永し赤旗までもくたびれる 柳宏子
作られた歴史の中の父の旗 夢 成
海外に出て日の丸のありがたさ 圭井堂
旗振りときなされ警士の職に生き 誓 二
面接へハタ振りそうなのも列び 柳 志
たどりつけば客も団体旗も疲れ 生々庵
日の丸はきれいな旗と思うのみ 薬 介
赤旗が自分の会社までつぶし 一三夫
旗出すのん忘れて連休疲れとり 与呂志

席題「古顔」

葵徳三選

村の古顔或る日後妻も頼まれる 万 的
顔出しただけで古顔まとも上げ 柳宏子
どっちでもよいから古顔立てておく 形 水
社長より古い守衛に髭がある 鬼 遊
古顔の睨みが効いてケリがつき 誓 二
白バラを胸に古顔黙らされ 柳 志
古顔の順に渋茶を出して来る 静 歩
記念日に古顔ずらり生きていた トメ子
古顔の目に逆った日の孤独 滋 雀
古顔が来て釣堀の魚を沈め 宣 介
古顔のコンプレックスは処女で老け 一三夫
古顔の鎖が音もなく切れる 水 客
古顔に肩叩かれて妥協する 圭井堂
古顔をそっと教えて座をはずし 静 歩
ひがまきぬように古顔の意見聞く 好 郎
病院の古顔鎖かも知れぬ 作二郎
古顔のどっかにボスが残ってた 古 方

古顔が笑うと巾旗立てておく 作二郎
古顔の悲哀孤独の椅子にいる 一三夫
古顔の貫録すでに風化する 鬼遊
足どりてわかる古顔の通路笠 生々庵
古顔がたった一びき釣ただけ 圭井堂
竹やりにモンベの古い顔でした 千万子
精彩を欠く古顔のマンネ調 勝晴
古顔だからゆっくりと手を洗う 夢成
園児にも古顔がいた滑り台 杜的
鼻のかげた方が古顔羅漢さま 生々庵
古参にも回転椅子の背が揺ゆい 徳三

兼題「ケチ」

神谷凡九郎選

ケチになり切れる秘訣のおそろしや 旅風
ケチたのし利鞘の算盤よくうごき 徳三
爪に火をともし長命の相失う 徳三
ケチになるべかりしのお人好し 旅風
駅まで三十分ケチで歩いておろし 鶴丸
地球儀を回しや何処でもケチ臭い 青夜
ハネムーンでもチラチラ見せるケチ 生々庵
ケチの財布の中で千円札のやすらぎ 夢成
ケチなことといえば冗談とうけとられ 新之助
損のない話へケチを乗せてくる 虎城
本格のケチは死金持たぬなり 鶴声
ケチつけたお菜で三杯お代りし 静馬
ケチっても今さらという赤字 頂留子
子のためのケチを子供はよろこばず 千万子
もう長うないでちんぼ金出した 好郎

くだらない相手へケチで押し通す 形水
義理だけはたすケチで貯まらない 弥生
ケチだけどスポーツマンの彼が好き 夢成
人生おもしろい義理かこ恥かこ頭かこ 古方
ケチ一つ守る夫婦の座りよう 水客
家計簿に妻が黒字のケチをのせ 一治
飲むからはケチケチするな俺がいる 双楽
真つすぐに歩いてケチの名を残し 滋雀
ケチ臭い話へ背伸びしてみせる 水客
アルミ貨も用意祖母の寺詣り 杜的
ケチンボの旅の土産に苦笑い 誓二
ケチン坊と呼ばれて清い小市民 トモ子
ケチを自覚してそれからの物忘れ 宣介
徹すればケチが第二の性となり 肖二
試みにケチな男が誘われる 藻介
愛情を小出しに私のケチな人 どんたく
ケチの根性を玉露のようにあたため 水客
生きた金というのがもひとつわらない 古方
使い道金嬉し泣きさせてこそケチ 凡九郎

兼題「話好き」

西田柳宏子選

話好きお茶とお菓子を持って来る どんたく
美しい流転話しの好きひとつだった 夢成
一睡もさせぬ夜汽車の話好き 双楽
話好き愛の言葉にほど遠く 水客
ハンドルがはらはらしてる話好き 酔々
去にかける人へ話題がまたからみ 鬼遊
写経そっちのけに尼さんの話好き 杜的

話好き妻には妻の世界あり 宣介
どぶろくまで出して主は話好き 万的
運ちゃんにすぐ叱られた話好き 藻介
話好き聞き上手が居てまだ続き 弥生
押し売りがとっ捕った話好き 滋雀
話好きおんなの虹を架けている 静歩
大阪弁まる出し女将の話好き 万的
街録へしゃべり足らない話好き 酔々
賑かな通夜にしている話好き 柳志
話好き駅まで送る回り道 花梢
愚痴半分女主人の話好き 花梢
ふんふんの返事でもよし話好き 維久子
看護婦に叱られている話好き 吉太郎
相槌を自分で打って話好き 醉升
同郷の訛りも派手に話好き 喜風
話好き門の外まで出て喋べり 維久子
根っからの善人で居て話好き 金三
入院をしてみたいくつな話好き 肖二
式次第狂わす社長の話好き 虎声
茶柱が何時か寝ていた話好き 杜的
通夜の茶が熱く話題が途切れない 水客
セールスも逃げ出して行く話好き 柳宏子

兼題「満員」

阿万万的選

特売の満員入らぬ品も買ひ 藤持
よく喋る舌満員を苦にもせず 青夜
アダムイブこの満員の世を知らず 青夜
満員御礼両陛下御観戦 鶴丸

旧友と目だけが合うた満員車 旅風
 満員車馴れて私に職がある 扇水
 スリの手も超満員に封じられ 章雅
 孤愁よれよれになる人の渦 トモ子
 満員の吊り広告を読み尽し 虎城
 満員の日本空へ地下へ伸び どんたく
 満員へマナーなどとは言うとれず 形水
 満員の市場へ双生児乳母車 花梢
 満員車隣も他人の肩で読み 静馬
 満員を承知で連休詰込む気 与呂志
 満員へスリも刑事も押しこまれ 柳志
 満員の事故遠く知る過疎地帯 金三
 満員にならぬ中にと案内状 鶴声
 事故起すまでは超満員にする 柳宏子
 雑役も満員でした釜ヶ崎 一治
 満員を解消しますと又値上げ 酔升
 満員電車誰かの臭鼻に来る 維久子
 満員もうれし彼女の肩をだき 千万子
 絶好のチャンス満員気にならず 与呂志
 満員へ女男の顔で来る 千万子
 大阪は病院さえも混んでいる 一三夫
 満員をマイクばかりが追いたてる 与呂志
 満員をさけて夜警の職に生き 鬼遊
 満員に女房の尻に付いて乗り 凡吉
 満員にスリ親切に押してくれ 静馬
 海猫の島にあふれて友を呼ぶ 水客
 満員をよそに運転手の孤独 一二三

満員車すりむけそうなミニの膝 生々庵
 満員車あなたまかせというポーズ 庸佑
 満員御礼サクラの祝儀も用意され 生々庵
 満員の電車に一人は小児マヒ 勝晴
 満員と知らずどっさり土産くれ 儀一
 満員車見送りベンチでおしめ替え 花梢
 満員に去年でこりたのに出掛け 恒明
 満員車今日も働く目が出合い 柳志
 顔ばかり書いて満員電車の絵 万的

兼題「切り札」 正本水客選

顔出しただけで切り札などいらす 正朗
 切り札がないから妻子にとばちり 芳子
 切り札に女がなれる武器がある 虎城
 捨て鉢になれば切り札こわくなし 祥月
 切り札に無策の策があるばかり 旅風
 切り札が有るかに見せている虚勢 章雅
 労資共切り札待ちの顔になり 文秋
 こぶしを開くと切り札が消えていた 藻介
 やめたると言うてる内はまだやめず 一舟
 切り札の線で重役真つ二つ 圭井堂
 切り札も出せず倒産ししまい 文秋
 しゃべらせておくと切り札秘めたま 頂留子
 切り札を切出す時期を見失ない 柳宏子
 恋の切り札蝙蝠傘をさしかける 徳三
 切り札のセリフが言える役が付き 吉太郎
 政党を切る毒舌の実力者 金三
 遺産分け母の切り札出て黙り 喜風

切り札を握る拳が冷えている 静歩
 切り札が出たからだまり込み 季賛
 稼ぐだけ時を稼いでさよならし 維久子
 切り札は要求入れる気の社長 綾女
 切り札もなし雨の日を寝るとする 万的
 切り札へ議長保留の決を執り 葛城
 切り札も出さず話にケリがつき 吉太郎
 切り札は紐つきだったかも知れず 金三
 沈黙という切り札に押切られ 静馬
 自分ではまだ切り札のつもりなり 庸佑
 切り札をいくつも持っている 藻介
 切り札に誤算があったあわてよう 一三夫
 妥結してから切り札を笑い合い 柳志
 スピードのAより強き悪を持つ 藻介
 口笛の悪魔が切り札持っていた 夢成
 切り札が静かに用意されていた 作二郎
 ワテ等結婚しますネと言う切り札 凡九郎
 切り札にしてるとうまい慰めよう 水客

短 信

▼小幡里風氏(倉敷市同人)は四月下旬、五日間のスケジュールでホンコン・マカオ旅行を楽しまれた。パスポートでの旅は戦後初めてで、特に香港の百万弗夜景は印象的であった。一八八十ももう香港の汗をかき一里風▼清水一保氏(鳥取県同人)本年も九月には鳥取川柳大会を開催することのこと。
 ▼不二田一三夫氏は新聞西新聞(五月十八日から六日間)「ぶれい読本」に連載執筆。

各地柳城

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

しきたりに負けて挙式の派手になり 滋雀
想像の鬼は女の角生やす 作二郎
豊かな想像クレヨンの赤い線 柳宏子
想像に反して別居したがらず 一舟
死の街となつて北浜夜となる 肖二
想像をたくましくする瞳に射られ 文秋
内職のママにバランス支えられ 喜風
窓からは雪洞だけがある夜景 白柳
想像の余白を残すザ・エンド 形水
簡素でも親の年忌はよくつとめ 誓二
真実かも知れぬバランスとれている 古方
人間の吐息か夜景の灯ちらついた 凡九郎
はた目には内の家計が楽に見える 金三
エリートコースママが背伸びしてる 智子
想像の世界はいつもパラダイス あいき
退屈のお詫びのような酒がでる 新之助
春麗ら成程猫も背伸びする 酔々
ご機嫌か一寸バランス狂つてる 儀一

想像はすまい水泡に期すばかり 鶴声
想像した程は甘くなかった新世帯 君子
背伸して夫に愛のオーバ着せ 大吉
増改築もとの簡素が見当らず 千代
想像で旅館は妻にしてみたい 静馬
吟味した指輪に簡素の中の贅 トモコ
ネオンひとつずつ消え深夜の顔とも 虎城
駅前の夜景大都市なみに映え 瑞枝
万博をおとぎの国にする夜景 章雅
山里の簡素な暮しにある未練 綾女
想像の底で年輪邪魔をする 葵水
へそくりはうまくバランス合せとき 好一
想像の逞しい人で打ち明けず 八郎
玉造川柳会 西出一栄報
改札もホッとしているスト中止 白柳
虹があるから明日を待っている 静歩
シャンデリアの下に未来を語り合う 照一
ハイジャック日本アメリカ並になり 肖二
人質になる肚になり詩が出来る 古方
ハイジャックあつて法律一つ増え 鶴声
都市改造隣りあわせに在る地獄 柳宏子
ハイジャック漫画過読で放つとけず 一舟
寸評に見られる個性の面白さ 頂留子
評されていそうに思う立話 芳子
結論を急ぎ自滅の評議会 誓二
批評家も矢張り所詮は結果論 金三
お金まで出して酷評してもらい 虎城
評判が長蛇の列をつくらせる 好一

そんな目で見るなと劇評あたたかい 六龍子
好評を受けて終った店じまい 滋雀
そう見える自分を他人の口で聞く 凡九郎
あつさり白状をして清々し 弘生
あつさりとしたもの次の恋さがす 育園
りゅうとして行けばあつさり貸し 静馬
あつさりと別れてからつもの思慕 柳柳堂
あつさりと云えばにっこり気も 儀一
あつさりと云われた叱言身にしみる 綾女
別れ話ずっと吞まれてうろたえる 千代
手もふれず別れた恋があつてなし 鬼遊
どっち向いても母の古さが衝いて 智子
古顔と云うので上席へ押しやられ 風仙洞
母の手にかかれれば古着甦えり 君子
暗号に思い当りのない日記 葵水
備前川柳社 目賀芳月報
歯車のようにと二人誓いあい 鮎ン坊
皮肉言うときの金歯がよく光り 三与子
歯痒さをこらえて夫の影におり 草二
相談欄歯がゆいような女居る 胡風
煮え切らぬ話に妻が歯がゆがり 芳明
長生きの秘訣を語る歯がきれい 一声
うっかりと八重歯の微笑にだまされ 秋月
歯をむいて吠えてもやはり舐は舐 芳月
ふところから入歯を出して飯にする 清春
年寄りの食べる話が歯にうつり 柳五郎
金歯見せ笑う美人に親しめず 宗郎
歯車の少し狂った倦怠期 正州

銀婚に備えて妻と齒をなおいし
齒ざしりをし乍ら女よく眠り
人の口のぞく齒医者の子がつがず
後押しにこの辺までは教えられ
久米雄

川柳たましま 水粉千翁報

別れしない愛へハンカチ洗って
薄氷をふみふみ甘さ抜け切れず
アンケート総理の眉は動かせず
チャンスかも知れず向い風に付つ
振り出しへ戻る終着駅の悔い
ぬれた手が受話器で乾くいい報らせ
万博をだしに逢いたい人が居り
ため息もじかに届けたアンケート
満足な日々です葉葉服洗う
振り出しへ背中を竜が邪魔になり
吉報へ遠耳の父蘭草刈る
箒持つ社長はチャンスなど云わず
吉報へ妻も少しは飲むという
林鶴

富柳会(富田林市) 阿部柳太報

飾りてた箱のお菓子のみずい味
身を飾る虚栄に心むしばまれ
結納がどつさりらしい飾りつけ
着飾って今日も帰らぬ未亡人
還暦に子供この頃やさし過ぎ
声色にやさしさを添え世をおよぎ
やさしいパパうるさいママと子の評価
取っておきのやさしい言葉を出し
うつぶんを大にやさしく話しかけ

花梢 耕人 美代

オルゴールやさしい姉がいてくれる
まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報

胸中も知らずライバル褒める役
浮気などするはずなしと見くびられ
地下勤務何時しか春の季を感じ
好きなようにしなはれと浮気は
紅梅も挿して事務所を春にする
浮気も認めて結婚三十年
マダムから浮気を説教されてくる
ちくちくと良心浮気を責めてくる
りくつつけ己もだましている
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

手紙では叱り小為替ポトリ落ち
プロポーズ妻の文箱にある弱身
感激の一瞬内助の功思い
三分間が感激でした赤電話
感激のあまり一駅歩いてみ
感激の男花道胸を張り
心配はかけまい手紙は無事とだけ
今日からは手紙を書くことならぬ仲
それらしい手紙とわかる娘の素振り
感激の涙と笑いのクラス会
仕合せは茶の間に笑い顔ならび
茶の間へも近所のニュース聞えて来
感激はするが薄志が邪魔をする
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

偶然へ歴史は意味をつけたがり
偶然に会うこともない背を送る
偶然に会うこともない背を送る
偶然に会うこともない背を送る

花梢 耕人 美代

人間の業苦春風閑知せず
平行の愛そそのかす春の風
お奇遇君も煙草をやめたのか
背信のある日偶然彼と会い
偶然が欲しい逢いたい人がいる
それからは偶然を否定せぬ女
春風も失意の僕に何故に吹く
春風に頬なぶられて待ちぼうけ
春風へ女の方から誘いかけ
春風を信ずればこそ冬を耐え
春風に乗って空果もやってくる
ない袖は振れぬに偶然無心来る
偶然の恋とは女思わない
偶然に会ったと仲人見合いさす
偶然の出合い養子のつらさ聞く
偶然が二三度重ってからの恋
ネオン街偶然会うておごらされ
偶然の客に保険で居直られ
春風が吹いてミニがよく似合い

静男 春風 奈々 雄大 虎声 太庸 河産 一峯 弥生 秋一 秋水 天笑 つき子 痴亭 静波 史々

増刷 句集「残照」(下共) 八五〇円

序文 椛元 紋太

紙貼函 瀧酒本 二二二頁
写真 六葉

浦和市三室松の木三六九四

小池 鯉生

春風に恋の季節を肌で知り
ほろ酔いの顔を春風なでてゆき
春の風ミニはく土筆もうれしそう
うまく運んで偶然ということにする
申告をすませ春風頬に受け
好郎

大阪通信病院川柳会 森下愛 論報

倅せの明日を信じて引くみくじ
信じても信じなくても引くみくじ
おみくじを信じる母の髪白し
マンホール梯子が声を出している
保安帽落成近いビル見上げ
観光の工事で荒らす花畑
手抜き工事見破れぬままオーブンし
高知川柳社(高知市) 川竹松風報
少年の思い出アルバムに生きており
少年の夢が父さんには不服
中卒は金の卵で迎えられ
カッコイだけで少年突ッ走り
お見合いの父に不服のアイライン
見合いとは知らず神事へ連れ出され
決めた人居るのに見合い躊躇せず
娘の見合い母美しく若返り
見合いすることは極秘で休暇とる
恋愛に破れ見合いに耳をかし
真剣に鏡に向う見合いの日
写真屋へ見合い写真と念を押す
親同士気が合っている見合いの座
シグナルの赤に団体わけられる
竹荘

生 長 双 楽 比 呂 路 白 柳 好 郎 夏 生 竹 荘 愛 論 草 右 没 食 子 英 二 史 葉 柳 水 伊 津 志 中 卒 た かし 紀 人 義 正 日 向 雨 勝 子 一 巻 瑞 穂 若 子 春 輝 未 遂 竹 荘

再訪を重ねセールス生きるみち
晩酌を飲みほし僕の今日終る
今日無事勤めてほしい靴みがく
姿見にうつる流転の五〇年
好きで好きで憎しみがなかつた
好雨

堺・若芽川柳句会(堺市) 和花草春報

念仏は鐘を叩いて口の中
念仏の途中で泣いてる子を叱り
孫達を並べ別れのお念仏
バアちゃんの念仏ぐちも混つて
念仏のテンポへ氷解けはじめ
土居川のほとりとテカテカネオンの灯
土居川が堺文化に追い出され
町人の町土居川は消えるとも
土居川の名残りを惜しむ花時計
地下鉄は地図持ち乍ら聞きとうし
国への母に堺の地図を添え
地図に置く我が家の夢の未来なり
塗りかえる地図血債つきまとい
ぜんざいも造っておきます地図を
宿題の地図写し取る窓ガラス
地図にない方が立派な道になり
古い地図ひらウロチョロドライブ
付添いの方が病人らしい顔
付添いは妻が一番よいと言ひ
付添いの云うた通りに熱を出し
付添いの母が思案をする縁談
付添いのママも園児の輪にはいり
静馬

海 州 松 風 窓 花 美 和 紅 雨 藤 持 德 子 茂 美 天 笑 誓 二 牛 歩 藻 介 白 柳 柳 信 欽 正 美 代 笑 痴 宏 子 金 三 千 万 子 双 楽 青 香 信 天 翁 摩 天 郎 遊 仙 静 馬

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 3452-114

夜間 06 4400 八

付添いが寝息をベッドの下で聞き
別居した妻も付添う子のベッド
入園へ母の方がテストされ
親心にもテストする現代子
最高を上へテストを母に見せ
雨の日もマイクテストは天気です
あの苦境テストだったと悟る地位
幼稚園のテストは指を皆使い
たつお
ウイロー社(ハワイ)

病み上り飛び飛びに読む週刊誌
小鳥さえ明日への希望かけて飛び
アポロ飛ぶ時世に逢える今日の幸
いつの日か飛んで行きたい月世界
故郷へ誘う雲ありゼット飛び
飛び出した子へ追っかけて送金し
乱れ飛ぶデマにも負けず愛に生き
魔花麗

飛び立った時の笑顔を抱きしめる 紅溪
孫の手をかりて飛び越す水溜り 拝山
年男飛び上っては豆を撒き 雪女
王手飛車逃げ道もなく待つてやり 河舟
日本の飛躍へ世界の眼が光り 泉水
跳躍台見事に越えた金メダル 北海
ぐつりと明日への飛躍夢に抱き 峯円

オーエスケー川柳会 大坂形水報

初免許あっちこちと見せ廻る 山下
茶華和洋免許は一応もってます 酒井
万博へ行きたいけれど高うつき 中野
日本には進歩あっても調和なし 鉄砲
切り札をソーツと伏せてやり過し 貞彦
電算機万博だけは外れ 創造
又ひとつ心配させる免許とる 亜成
万博を見てアホウに見ぬアホウ 健坊
子供でも一番先に月の石 順造
近代化したカードに悩まされ 泉水
万博へ休暇を取って母を連れ 一扇
免許取り立て助手席で恐くなり 豊博
期間中万博利用で荒ら稼ぎ 重広
カード切る手許も慣れてパー勤め 神田
当分のお世辞はどうぞ万博へ 常夢
万博の団体疲れた顔ばかり 形水
ポストまで自動車で行く新免許 木石
ラッシュ並みといふ万博のモノレール 白柳
人間をさばくカードを持って立ち 入仙
川柳塔まつえ・葦川柳会 祥月報

パジャマ着て見送るもよし療養所 信吉
見送るとベッドへ戻り目をつむり 唾蟬
月を追う雲足ににくいほど動き 晃
古傷も消えて再会の酒に酔い 白揚
しつけ糸とって祭へ子を送り 李朋
子の学資送るを生き甲斐とも感じ 美樹子
送られてまだ血が騒ぐ初デート 狂太
太鼓判で送ってくれるレントゲン 由田可
政界が動きまっ黒い噂まく 明朗
黄昏れの峠恋しくなる我が家 雪美
無言の行めいてパチンコ音ばかり 鉄花人
崩してはならぬ積木の影ゆらぐ 可動
バラ咲けり浮気の色に黄に咲けり 酔歩
子沢山金婚式も華やかに 澄水
張りたての障子にころあたたまり 白水
人形へ添寝少女の瞳がきれい 千代
補聴器の母へひばりに宮田輝 紫吻
待たなしの直面となり大惨事 孤呂二
残念ながら一等政治家がい無い 鶴丸
他所ゆきの美辞が疎遠を物語り 通児
愛して愛して背かれ春の灯が痛い 晃男
地球に愛ありてカーテン今朝重し 天痴人
春の空春の湖詩がうるる詩がうるる 祥月
胸つなぎ 岸 南柳報
ヒロインになった気でもメロドラマ 市子
文化とはとに角金のかかるもの 河太郎
決断をデザートの時に迫られる 悟郎
支えてる子供の手前汗をかき 南柳

酒飲みの涙もろさをふと見つけ 育園
プライドは捨てたに涙出る今宵 柳信
根掘り葉掘りに倅せな貌しとく 美代
天狗鼻折られて席に姿無し ひとし
鼻つまみ主人不在にする受話器 喜正
鼻すじへ男まさりの影をみせ 宏子
手不足と知って前借する憎さ 詳恵
ひと言の寝言で夫婦もめ続け 規一郎
乗りおくれ同士馬合う話好き 摩天郎
乗りおくれましてんと女からみつ 小松園
強情を張ったばかりに乗りおくれ 白柳
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻 圭水報

句会往来

橋上駅 流れる雲を見てる午後 金三
橋上駅 線路またいで西東 双葉
橋上駅 寒風ちようど通るとこ 圭水
橋上駅 団地の向うに稲穂見え 和郎
橋上駅 しばし眺めも見ゆるとり 宏子
老人の脚を無視した橋上駅 八郎

▼南大阪川柳会 六月十八日(木) 午後六時
— 題・老友・反省・光・ねだる (松崎町二丁目、以和貴荘)

▼南海川柳会 六月十八日(木) 午後六時
— 題・モノレール・早とちり・あてはずれ。
▼玉造川柳会 六月二十一日(日) 和歌山吟行。国鉄天王寺午前九時二十一分発。題・調和・ひたむき・吟行雑詠・宿題・一と言。

後藤梅志著

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料とも 五百五十円
— お申込みは川柳塔社へ —

暑中広告受付!

本誌五分の一段が千円です。
グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・六月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が二百円

川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

八月号発表表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

集 近作柳樽 (10句) 北川 春果 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

募 「ライバル」 奥谷 弘朗 選

「退屈」 久家代仕男 選

「嘘」 大鶴 喜由 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りま
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

九月号発表表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

集 近作柳樽 (10句) 北川 春果 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

「ヌード」 杉原 愛鳩 選

「鈴」 林野 魁光 選

「主役」 国弘 半休門 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字
は楷書で新かたがねにしてください。

会句悼雨緑本橋

日時 六月八日 (月) 午後六時
会場 以和貴荘 (いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

柳 話
「善鼻」
「メニユー」
「失言」
柳 水 白
阿部 柳 太
金井 文 秋
傍島 静 馬
若本 多 志
三題 (題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

7月の兼題 「恩師」 「ロマンス」 「筋骨こつ」

定価 百八十円 (送料六円)

半年分 千 百 円 送料共
一年分 二千六百六十円 (送料負担)

昭和四十五年 五月二十五日印刷
昭和四十五年 六月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 印 刷 所 大陽印刷株式会社

発行人 中島 蓬太 郎

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草

★折り返しし地点という、六月号へ来てしまった。どうやら、またナンバーをふやしただけにとどまったようである。

★昭和四十年九月号・第四六〇号で「川柳雑誌」がおり、その年の十月号から「川柳塔」と改題して五七号。とにかくここまでやってきて、古風な表現だが、まだ左うちわにならない。

柳誌というものは、こういうモノである。

★最近「魅力ある雑誌」とか「魅力のない柳誌」ということを耳にするが、いったい「柳誌の魅力」って、どんなことをいうのか。

★破調の句にひかれる人もあれば、なんでもかんでも五七五という作家もいる。読み物にしてもそうでないが「愛誌」といつて、「愛国」に似たものを雑誌に寄せた時代があった。いまは気にいらないとブイと横を向かれてしまう。だから、この「魅力ある雑誌」とは何か？頭を抱えているわけである。

★魅力とは、自句を多くとってくれる柳誌のことだろうか。

★「川柳雑誌」終刊当時より、現在のほうが読者がふえている。これを来月の路郎忌にご報告申しあげたい。

★路郎先生ご在世のころ、

同人諸氏の原稿や、句会などの選者に、わずかでも稿料、選句料というものをわたせないか——とうかがったことがある。先生は、早く、そういう時代が来てほしいね。と、おっしゃったが、これは月へ石を拾いに行くよりむずかしいことも知れない。

★大阪で一日に五百万円の売り上げがないと、やっていけない本屋さんがある。だが、四百万円より売れないので、あと百万円獲得に必死だそうだ（文秋氏談）こうしたモロモロの書籍にまじって「川柳塔」もそこでガンバッテいるのだが、ちよつとやそつとの「魅力」では歯が立たないようである。

★「PL婦人」という月刊誌に「泣き笑い標語人生」と題して、ボクが紹介されているが、豪華な雑誌であ

豊かな生活にご奉仕する
近鉄百貨店へ——



近鉄

アベノ店 621-1231 / 上本町店 779-1231

る。定価は百円。発行部数はおそらく二十万近いのではないかとおもいますが、稿料もここまですれば、稿料も出せるし、どんな本の中にかざられてもヒケ目を感じない。

★本誌は月末発行を「魅力」に創刊号からそれに徹したのだが、ついに二、三回ボロを出してしまった。ここでもよく書くように、発送日にはかならず、好郎、白柳薫風三氏が応援に駆けつけてくださる。たとえ一時間

でも早く皆様にお届けしたい「愛誌精神」からである。★菓子さんも「ようやる」。この人の根性が遅刊をとり返えしてくれた。まだ編集にもかかっていないうちから「今月は二十五日発送ですか」とハッパをかける。

★彼女が山陰へ行ったとき「美智子妃を迎えるようです」とあちらの女流作家からおたよりをいただいた。彼女の「魅力」の一つに「愛誌精神」もかぞえたい。

(不二田一三夫)

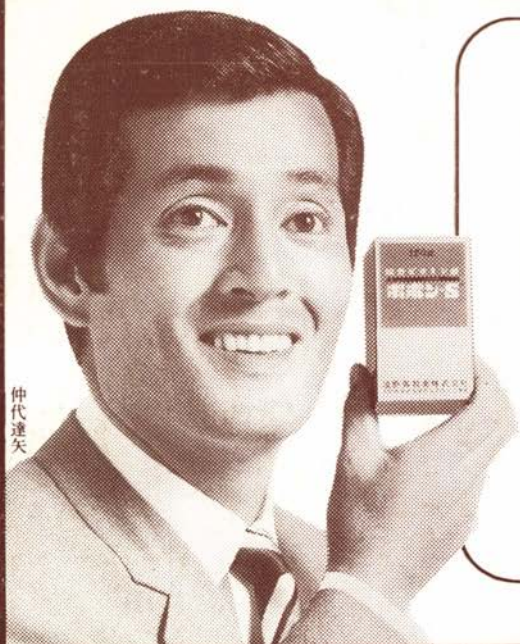
疲労・倦怠感・神経痛

毎日のもう
アリナミンA

04

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十五年五月二十五日 印刷
昭和四十五年六月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 六月号



仲代達矢

明日のために
今日ものむ
ポンス

シオノギ製薬

戎橋
大阪

味に輝く

北極星

TEL 06 (641) 1275 (代)



チェーンご案内

戎橋本店	味堂やわらぎ 結婚式場 やわらぎ	曾根崎店	野田阪神店	野田阪神店	永楽橋店	百舌鳥店	庄内和連道山岩子	阪喜住瓢江孫	本店
------	------------------------	------	-------	-------	------	------	----------	--------	----

定価 百八十円 (送料六円)